



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北欧アイスランド文学の歴史（1）：「リームル」からロマン派まで
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 128, 139(左)-194(左)
Issue Date	2009-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38829
Type	departmental bulletin paper
File Information	128_005.pdf



北欧アイスランド文学の歴史 (1)

——「リームル」からロマン派まで——

清 水 誠

Íslensk bókmenntasaga (1) — frá rímum til rómantíkur —

(The Annual Report on Cultural Science No. 128. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2009. ISSN 1346-0277)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@lit.let.hokudai.ac.jp)

1. はじめに

1.1. 「サガの島」—— 中世文学の遺産

北極圏をかすめる絶海の孤島、火山と氷河の国として知られるアイスランド (Ísland) は、Sögueyja と呼ばれることがある。「サガの (sögu < saga) 島 (eyja)」という意味のこの呼び名は、中世のサガ文学にちなんだ愛称である。「サガ」は本来、「物語、歴史」を意味するが、中世ヨーロッパで比類ない質量を誇るこの散文作品群には、この国の起源と歴史が詳細に語られている。

アイスランドの建国は西ノルウェー出身のヴァイキング (víkingar) を中心に、スコットランドの島々とアイルランドを經由して、ケルト系の人々、とくに女性たちを交えた 870 年頃の定住にさかのぼる。記録に残る最初の定住者は、867 年頃にこの地に到達し、874 年に再び訪れて今日の首都レイキャヴィーク (Reykjavík) に居住を開始したインゴウルヴル・アルトナルソン

(Ingólfur [Ingólfr] Arnarson) である (カッコ内は古語のつづり)。ハラルド美髪王 (Haraldur [Haraldr] hárfagri 850 頃～933) によるノルウェーの中央集権支配への動きを嫌い、人口増加による圧迫と経済的利益を求めて大量移住が行われた 870～930 年頃は、「植民の時代」(landnámsöld) と呼ばれる。アイスランド植民は、赤毛のエイリクル (Eiríkur [Eiríkr] rauði Þorvaldsson 950頃～1006頃) による982年のグリーンランド (Grænland) 発見、エイリクルの息子、レイヴル・エイリクソン (Leifur [Leifr] heppni Eiríksson 970 頃～1020 頃) による 1000 年頃の北米大陸 (Vínland, 「ワインの国」の意味) 沿岸部への到達を含めて、ヴァイキング活動による西方拡大の一環として捉えられる。

930 年には本国ノルウェーの法慣習にならって、南西部のシングヴェトリル (Þingvellir, 「会議 (þing) の平原 (vellir)」の意味) で国民議会と言うべきアルシング (全島集会 Alþingi) が設立された。これ以降、大陸プレートが重なる同地で毎年、夏に 2 週間、全島から代表者が集い、36～39 の首長領 (goðorð) を統括する首長たち (ゴーザル goðar, 「ゴージ」(goði) の複数形) を中心に法律が制定され、種々の問題が討議された。植民は 1100 年頃まで行われたが、「アイスランド人のサガ」(Íslendingasögur) に語られている諸事件が起こったとされる 930～1030 年頃の「サガの時代」(söguöld) を経て、1262 年までは「共和制の時代」(þjóðveldisöld) が続いた。この時期にアイスランドの人々は自由と独立の日々を享受できた。

999～1000 年には、争いを回避するため、ノルウェー王オウラヴル・トリグヴァソン (Ólafur [Ólafr] Tryggvason 963 頃～1000) の命に従って、キリスト教への改宗 (kristnitaka) を受け入れた。1056 年と 1106 年には南北の司教座が置かれ、神学 (guðfræði) を中心に学問が開花した。12 世紀のアイスランド人は歴史と文学への深い関心と高い識字率で知られていた。1100～1350 年頃には、それまで口頭で伝えられていた散文叙事文学サガの膨大な作品や北欧神話の精髓を伝える『エッダ』(Edda) の歌集などが、大量の写本 (handrit) に書き留められた。この「写本筆写の時代」(sagnritunaröld) はゲルマン人の雄渾さを核とし、おそらくケルト人の豊かな想像力を交えて

開花した中世アイスランド文学の総決算である。この文学的遺産は後述する「リームル」(rímur)とともに家庭で語り継がれ、人々の血肉となり、誇りとなって受け継がれていった。

アイスランド文学と言えば、ギリシャ語の場合に似て、本国以外では現代よりも遠い過去の遺産を連想するほうがむしろ多い。また、アイスランド語 (íslenska) は驚くべき古風な性格からヨーロッパ屈指の難解な言語として知られ、他国の人々の関心を集めてきた。文学的遺産がこれほど国民に共有され、一国への関心がこれほど文学と言語に集中しているのは、きわめて稀な例と言えよう。

1.2. 苦難の歴史と独立への道——他国支配と自然災害の克服

その後の人々の歩みは平坦ではなかった。共和制を支えた首長(ゴザル)は8つの豪族(あるいは5つの氏族)の権力下に統合され、豪族どうしが覇権を争う「ストゥルトルンガルの時代」(sturlungaöld 1220~62)に突入した。アイスランドは平和を回復するためにノルウェー王と「古協定」(Gamli sáttmáli 1262~64)を結び、貢物を収める代わりに庇護を求めたと言われ、1262年にノルウェーの属国に下った。これは「協定」であり、「支配」とは異なるが、共和制は終焉を迎えた。1380年にはノルウェーがデンマークと同君連合を結んだために、デンマーク領となった。

その後の歴史はまさに苦難の連続だった。15世紀にはヨーロッパ中を襲ったペスト(svartidauði)がアイスランドにも到達し、1402年の流行では住民の約3分の1が犠牲になった。大規模な疫病は1494年にも襲来した。気候の寒冷化と植物資源の搾取によって、森林の衰退と土壌の侵食も進行した。

16世紀に入るとデンマークの支配が強まり、1550年には宗教改革を暴力的に強制された。1602年以降は外国との通商を禁止され、実質的に約250年間、自立的経済発展の可能性を奪われた。暗黒の18世紀には天然痘の流行や飢饉に見舞われ、1783~85年の火山の大噴火と地震、大飢饉は深刻な被害をもたらした。デンマーク本国も、生き残ったアイスランド人全員をユラン(デ Jylland, ド Jütland「ユトランド(ユートランド)」)半島北部へ移住させる

ことを検討したほどである。そして、長らく自由の象徴だったアルシンギが1798年の集会を最後として、1800年に廃止された。

しかし、19世紀を迎え、ナポレオン戦争の嵐とスウェーデンとの抗争の中で、1814年にノルウェーをスウェーデンに割譲するなどしてデンマークの対外権力が衰えを見せ始めると、ヨウン・シーグルソン(Jón Sigurðsson 1811～79)の主導の下に、国民主義的理念から独立運動が粘り強く展開されていく。1843年にはアルシンギが諮問機関として復活し、1855年にはデンマークの通商独占が最終的に撤廃された。建国千年祭を祝った1874年には憲法を得て、デンマークの絶対王政支配は終わりを告げた。1882年には北部のフーサヴィーク(Húsavík)で最初の商業組合が結成され、1886年にはレイキャヴィークでアイスランド国立銀行(Landsbanki Íslands)がスタートした。1904年にはレイキャヴィーク在住のアイスランド人の大臣が置かれ、自治権が大きく拡大した。そして、1918年にはデンマークと同君連合として主権国家となり、実質的に独立を達成した。

アイスランドは第一次大戦の戦禍は免れたが、世界恐慌の余波を強く受けた。第二次大戦期には、1940年にナチスドイツがデンマークを占領すると、そのアイスランド侵攻を阻止し、アメリカとのルートを確保する目的で、イギリス軍による一方的な占領を受けた。翌年、代わってアメリカ軍の駐留開始を許しながらも、1944年、ヨウン・シーグルソンの誕生日に当たる6月17日にシングヴェトリルで独立を宣言し、ついにデンマークから完全独立を遂げた。

1946年には国連加盟を果たした。1949年には賛否両論の渦中でNATO(北大西洋条約機構)の一員となり、1951年にはアメリカ軍が南西部のケフラヴィーク(Keflavík)に基地を置くことを余儀なくされた。1970年には欧州自由貿易連合(EFTA)に加盟した。1980年には初の女性大統領ヴィグディス・フィンボガドゥフティル女史(Vigdís Finnbogadóttir 在任1980～96)を選出している。1986年にはレーガン・ゴルバチョフ会談がレイキャヴィーク郊外のヘヴジ(Höfði)で行われ、東西冷戦に終止符が打たれる舞台となった。1992年には他の欧州自由貿易連合(EFTA)諸国と欧州経済地域(EEA)を

形成する条約に署名し、2年後に実施に移された。2006年には最後のアメリカ軍兵士がケプラヴィーク基地から撤退した。人口は1920年代に10万人、60年代に20万人、21世紀初頭には30万人に達した。近年のアイスランド社会にはかつての均一性が失われる傾向も認められるが、例外的に人口が急増している先進国として、インフレの波と経済危機を克服しつつ、高い文化と生活水準を保って今日に至っている。

1.3. 化石のような言語 — ヨーロッパ言語の奇跡

苦難の多い人々の歴史とは裏腹に、その言語の生長は恵まれていたと言っても不当ではないかもしれない。アイスランド語に属する「北欧語」は、正確には「北ゲルマン語」、伝統的には「ノルド語」(norræn mál)と言う。それにはスウェーデン語(スvenska)、デンマーク語(デdansk)、2種類のノルウェー語(ノnorsk) — ブークモール(ブbokmål)とニューノシュク(ニュnynorsk) —、アイスランドとノルウェーとスコットランドを結ぶ三角形の中心に浮かぶフェーロー諸島(フェFøroyar)で約5万人の話者に用いられるフェーロー語(フェføroyskt)が属する(以下、本稿では「北欧語」、「古ノルド語」とする)。現代アイスランド語は32万人余の話者を数えるにすぎない(2008年末の統計)。しかし、他の北欧諸語と違って、千年以上前から文法構造の骨格がほとんど変化していない化石のような言語である。ちょうど小笠原諸島あたりで紫式部や清少納言たちが生きていると思えばよい。アイスランド語には現代語で解説した古語の辞書は存在しない。それでも、アイスランドの人々は中世の文学を容易に読みこなすことができる。日本の私たちは辞書や注釈書なしに、源氏物語や枕草子をどれほど理解できるだろうか。アイスランド語はヨーロッパ言語の奇跡と呼ぶにふさわしい。

他の北欧語の多くは、北ドイツのハンザ商人の経済進出による低地ドイツ語(北ドイツのドイツ語方言の総称)の流入など、他言語から強い影響を受けて言語構造が大きな変化を被った。ノルウェー語のように、政治的抑圧の中でデンマーク語を文章語として使用することを何世紀も強制され続けた例もある。しかし、アイスランド語の驚くべき独自性は、遠隔地の島国という

地理的要因だけによるのではない。これは人々の強烈な国民意識と独立精神による不断の努力の賜物でもある。外国語の影響にさらされた点では、アイスランド語も例外ではない。低地ドイツ語に続いて、17世紀以降はデンマーク語からの外来語流入の荒波を被った。しかし、アイスランド語の使用は一度も禁止されず、話者たちは中世の文学的伝統を誇りとして母語の擁護に励み、広汎な新造語(nýyrði)によって自らの保有する語彙を縦横に駆使することで乗り切った。farsími「携帯電話」(far「移動」+sími「ひも」), sjónvarp「テレビ」(sjón「映像」+varp「放出」), tölva「コンピューター」(tala「数」)という例からもこの事情はうかがえよう。見方を変えれば、文法構造の保守性とは裏腹に、アイスランド語は独自の革新性に富んだ語彙体系を有する言語であるとも言える。ある調査によると、最も使用頻度の高い520語の中で500語がすでにサガ時代に存在し、残りの半分も宗教改革期の1550年までに現れており、それ以降の近代アイスランド語期に生まれた語は10語にすぎないという。今日では社会的均一性にも変化の傾向が見られるが、それでもヨーロッパ諸国中、多言語使用の問題がとくにないのはアイスランドだけである。

1.4. アイスランド文学への招待

古アイスランド語で書かれた『エッダ』、サガ、スカルド詩に代表される北欧神話、散文叙事文学、歴史書、年代記、詩学書、法律書などの膨大な文献は、ゲルマン語圏で比類ない独創性と圧倒的な質量を誇り、19世紀以来、国際的注目を集めてきた。古語の特徴保持と古期の文献伝承の点でアイスランド語の右に出る言語は、ヨーロッパでは例を見ない。日本では1981年に「日本アイスランド学会」が設立され、環境政策、地質学等でも注目を引き、観光客も増大している。しかし、従来の日本のアイスランド研究は中世文学および歴史学に偏り、近現代アイスランド語学文学の領域は手薄である。文学作品のわずかな紹介例は他言語からの重訳が多く、1955年にノーベル文学賞を受賞したハルドウル・ラハスネス(Halldór Laxness 1902~98)の数点の翻訳等にほぼ限定されている。アイスランド人は世界一多く本を読む国民と言われるが、近代以降はほかにも数多く作家を輩出している。たとえば、『ア

アイスランド作家便覧 a-l/m-ö』(*Íslenskt skáldatal a-l/m-ö* 1973/76) に掲載された作家は、男性作家 472 名、女性作家 56 名の総計 528 名にのぼる。人口約 32 万人の小国家としてこの数字は驚嘆に値する。その後に世に出た現代作家も少なくない。

本稿は中世後期から 20 世紀後半に至る約 6 世紀のアイスランド文学史概説の冒頭部分である。とくに 19 世紀以降の近現代文学を詳述している。取り上げた詩と短編は、すべてアイスランド語原典（一部、デンマーク語原典）からの直接訳による。とくに配慮したのは、アイスランド社会の発展と言語擁護の歴史である。これはアイスランドの歴史が人々の国民意識、とくに言語と文学に強く結びついて展開してきた事実による。ただし、資料的限界と筆者の能力不足のために、作家と作品の詳細は参考文献に挙げた先行研究に負うところが大きい。活躍中の作家については、文学史上の記述的制約から少数の例外を除いて、最小限の言及にとどめた。

1.5. アイスランド語のカナ表記と発音について

本稿には固有名詞が数多く登場するが、アイスランド語のカナ表記には統一的な基準がなく、音韻体系も日本語とは著しく異なる。p/t/k と b/d/g の区別ひとつを取っても、無声と有声ではなく、気音(英 aspiration)、つまり吐く息の強弱による。アイスランド語は音韻の面ではかなり大きな変化を被ったが、本稿では古語の推定音による表記は避け、現代語の発音を優先し、できるだけ原語の発音に近い表記を採用した。また、原語の語形に忠実に表記し、英語文献などを模倣して語尾を省略する表記は避けた。たとえば、Sigurður は「シーグルズル」とし、「シグルド」(英 Sigurd) は避けた。ただし、「エギルのサガ」(Egils saga Skallagrímssonar) などの中世期の作品名と「スカルド詩人」(skáld) などの一般的な用語は慣習を尊重し、現代語音による「エイイトルのサーガ」、「スカウルド詩人」とはしない。

以下では、おおまかな決まりと特殊文字の読みかたを紹介しておこう。

母音は基本的にローマ字読みし、a は [ア(ー)], e は [エ(ー)], i は [イ(ー)], o は [オ(ー)], u は [ユ(ー)] と発音する。ただし、短い u は「ユ」

ではなく、便宜的に「ウ」と表記する。母音の長短は音節の構造により、後ろに複数の子音 (p/t/k/s+v/j/r を除く) が続くときには短く、そのほかは長い。ただし、その他の場合も少なくない。ng が続くとき ang[アウング], eng[エイング], öng [エイング] (唇を丸めて) などとなる。

母音字 á, ó, é, í, ŷ, ú はアクセントとは無関係で, á[アウ], ó[オウ], é [イエ(ー)], í/ŷ [イ(ー)], ú [ウ(ー)] と発音する。í と ŷ は同じ発音であり、語源によって区別する。i/y[イ(ー)]も同様だが, í/ŷ よりも口の筋肉をゆるめて発音する。æ は [アイ], ö は唇を丸めた [エ(ー)], au は唇を丸めた [エイ] であり、「エ(ー)」、「エイ」と表記する。同様に jö も「イエ(ー)」と表記する。

アクセントはすべての語で第1音節にある。固有名詞を含めて、例外なくつねに語頭を強く発音する。

アクセントを持つ音節では、別の子音が隣接しない場合、子音にも「いっそう」、「みんな」の「っ」、「ん」のような二重子音の発音がある。無アクセント音節では二重子音の発音はない。

j は英語の yes の y-[イ]であり、[ジ]ではない。g は[グ、フ、イ] (skógur [スコウグル], skógs [スコウフス], skógi [スコウイ], 「森」の変化形) などとなって複雑だが、[ジ]とは発音しない。r は巻き舌の [ル] であり、英語と違って [ア] などと母音化しない。あいまい母音 ([エ, ア ə]) の発音はない。guð(-) (「神」とその複合語) は [グヴェーズ, グヴズ...] と発音する。

ð は英語の the の濁った th-, þ は英語の think の澄んだ th- に近い。

s はつねに澄んだ [ス], f は母音間や有声子音の前で濁った [ヴ], その他は澄んだ [フ] である。ll は母音の後で [トル], nn は二重母音の後で [トン], rl/rn は [ルトル]/[ルトン] (早く発音すると [トル]/[トン]) となることが多い。fl は [プル], fn は [プン], pt は [フト], ps は [フス], kt は [フト], x は [ハス]。

ds/ts の代わりに 1929 年の正書法改正で導入された z の文字は、1973/74 年の改正で廃止され、一部の固有名詞 (Zoëga 「ソエガ (人名)」など) や外

来語を除いて、今日では s を用いる。

pp, tt, kk p/t/k+l/n の連続では, p, t, k の前に強い息の音が入る。たとえば, dóttir 「娘」は [ドウフティル], vatn 「水」は [ヴァハトン] となる。ただし, 属格形 vatns は [ヴァッス] と発音する。barn [バ(ル)トン] 「子供」, hrafn [フラプン] 「カラス」の属格形 barns [バッス], hrafns [フラフス] も同様。

1.6. アイスランド人の名前について

アイスランド人は古来の慣習に従って, 原則として姓 (苗字) を持たない。大多数の人名は「名+父親名 -son (男性)/-dóttir (女性)」となり, 「...の息子/娘」という構成をとる。たとえば, ヨウン (Jón) を父親に持つ場合, 男性シーグルズル (Sigurður) は「シーグルズル・ヨウンソン」(Sigurður Jónsson), 女性グヴズルン (Guðrún) は「グヴズルン・ヨウンズドウフティル」(Guðrún Jónsdóttir) となる。したがって, 結婚後も名前は変わらない。正式な人名は「名」の部分であり, 電話帳などでも「名」を基準に配列する。本稿では同一人物の名前を繰り返す場合に, 「名」の部分で呼ぶ。

父親名の部分は「...の」意味する属格 (英 genitive) の形に変化するので, もとの語形と著しく異なることがある。たとえば, エルトン (Örn) を父親に持つ男性ヘルギ (Helgi) は, 「ヘルギ・アルトナルソン」(Helgi Arnarson) となる。「名」は3つまで認められている。愛称として2音節の短縮形があり, 男性はシggi (Siggi<Sigurður) のように -i で終わり, 女性はグンナ (Gunna<Guðrún) のように -a で終わる。ノンニ (Nonni<Jón), フーシ (Fúsi<Sigfús 「シフフス」) のような慣例もある。

例外的に「姓」を持つ人名や, 「姓」に相当する要素を父親名の代わりに用いたり, 併記する例も次のように少数ある。①デンマーク語的な語形によるもの (tho- は「トウ, ト」と発音する): ビャルトニ・トウラレンセン (Bjarni Thorarensen), ②地名・出身地にちなむもの (属格などの格変化や前置詞 frá, úr, á, í を伴う): ハルドウル・ラハスネス (Halldór Laxness), シーグルズル・ブレイズフィエルズ (Sigurður Breiðfjörð), スターファウン・フ

ラウ・フヴィータダール (Stefán frá Hvítadal), ヨウン・ウール・ヴェール (Jón úr Vör), ベーネディフト・ヨウンソン・アウ・エイズヌム (Benedikt Jónsson á Auðnum), ③その他: エイナル・ヒェルレイフソン・クヴァーラン (Einar Hjörleifsson Kvaran)。

本稿では一般的な呼称で人名を表示する。たとえば, 新ロマン派の詩人ダーヴィズ・ステーフアウンソン・フラウ・ファグラスコウイ (Davið Stefánsson frá Fagraskógi) は「ファグリスコーグル (Fagriskógur) 出身の (frá) ステーフアウン (Stefán) の (-s) 息子 (-son) ダーヴィズ (Davið)」の意味だが, 本稿では慣例に従って「ダーヴィズ・ステーフアウンソン」とだけ表記する。

地名については後述する。固有名詞や重要な概念にはアイスランド語の原語を添えた。地名・人名以外の重要概念がアイスランド語以外の場合には, 英 (英語), ド (ドイツ語), デ (デンマーク語), ス (スウェーデン語), ノ (ノルウェー語), プ (ノルウェー語ブークモール), ニュ (ノルウェー語ニューノシュク), フェ (フェーロー語), ラ (ラテン語) と記した。

なお, 引用したアイスランド語テキストは今日の正書法と多少の異同を含む場合があるが, 原則として出典として用いた原文の正書法で示した。

2. サガ時代以降の文学と言語擁護 ——「リームル」から言語学者ラスクまで——

2.1. 「リームル」の伝統

中世アイスランド文学と言語の伝統は, 国民意識の確立と政治的独立の過程でつねに重要な役割を演じてきた。サガ文学の伝統が終焉を迎えた 14 世紀以降, 特筆すべきジャンルは「リームル」(rímur) と呼ばれる匿名の民間伝承詩である。頭韻 (stuðlun) と脚韻 (ríma) を踏む四行詩 (ferskeytt vísa) をひとつの「リーマ」(ríma) として, それを積み重ねていく形式を取る。踊りを伴った歌, つまりバラードにスカルド詩の比喩表現であるケンニング

(ケニング kenning, 名詞句による名詞の置き換え) やヘイティ (heiti, 他の名詞による名詞の置き換え) の技巧を取り入れて発達した。叙事的内容に基づき、空想的内容のサガや古代のサガ、『エッダ』、外来の騎士物語を題材とすることが多い。婦人への空しい恋愛感情のほかに、技量の限界や高齢の嘆き、世相批評など、作者の主観的感情を吐露する叙情的内容の「マンセイングル」(mansöngur, 「乙女 (man, 英 maid(en)/ド Magd) への男性詩人の恋の歌 (söngur)」の意味) で導入される例も見られ、ドイツのミンネザング (ド Minnesang) の北歐伝承の可能性が指摘されることもある。サガと同様に、リームルも原則として男性を作者とする文芸ジャンルだった。15 世紀には 199 のリーマから成り、神話に題材を取った長大な作品「スキージのリーマ」(*Skíðaríma*) も生まれた。

リームルはステンムル (stemma) と呼ばれるメロディーを伴って、約 500 年間、アイスランドの人々の家庭に語り継がれ、題材の範囲を拡大しつつ、世俗文学の伝統を後世に伝える重要な手段となった。後述するロマン派の詩人ヨウナス・ハトルグリムソンのように、リームルを時代遅れの停滞した芸術とみなす意見もあったが、19 世紀になっても後述するシーグルズル・ブレイズフィエルズやハウルマル・ヨウンソンのように、すぐれたリームル詩人が現れた。新ロマン派の詩人エイナル・ペーネディフツソンもリームルに大きな関心を示した。文献学者フィンヌル・ヨウンソン (Finnur Jónsson 1858~1934) による辞典や『リームル集大成』(*Rímnasafn* 1905~22)、ビェルトン・カーレル・ソウロウルフソン (Björn Karel Þórólfsson 1892~1972) による『1600 年以前のリームル』(*Rímur fyrir 1600* 1934) をはじめ、研究業績も数多い。文献学者シーグルズル・ノルダル (Sigurður Nordal 1886~1974) は『アイスランド語読本 1400~1900 年』(*Íslensk lestrarbók* 1924) でリームルを古来の詩語と韻律の宝庫とみなして、その意義を強調した。

2.2. 4 編の文法論文

古来、母語への関心が高いアイスランドでは、12 世紀半ばから 14 世紀半ば

に由来する題名を欠いた異なる著者による4編の文法論文が伝えられている。それはスノッリ・ストゥルトソン (Snorri Sturluson) による『スノッリのエッダ』(Snorra-Edda) を含む14世紀前半の写本 (Ormsbók Snorra-Eddu/ラ Codex Wormianus) に収められ、第1・第2論文では音論と正書法、第3・第4論文ではおもに文体論と修辞学が扱われている。ここで言う「文法」はラテン語で中世の *ars grammatica* を指し、詩を書くための実用的な技術の習得が念頭に置かれている。

とくに名高いのは、1150年頃に匿名の著者が起草したと推定される『第1文法論文』(*Fyrsta málfræðiritgerðin*) である。著者はラテン語の広範な知識を持ちつつも、ラテン語文法の規範に縛られない当時のアイスランド語の独創的な音韻体系 (とくに母音) の考察と正書法の提唱を行っている。近代の構造主義を思わせる弁別特性と最小対立に相当する概念を用いた「第1文法論者」(*fyrsti málfræðingurinn*) によるこの論考は、ゲルマン語最古の言語学的考察であり、どの言語と比べても「1930年代の初頭以前では、最もすぐれた言語の音韻記述」(エーリ・フィシャ＝ヨーアンセン『音韻論総覧』) と賞賛されるほどである。すでに *samhljóð*「子音」などの用語を用いている。第2文法論文は子音、母音、半母音の区別と音用論 (英 *phonotactics*) を扱っている。音節内の位置で子音の分類を行い、古英語から借用した *ð* の文字を母音に後続する舌尖歯茎摩擦音に用いて、母音に先行する *p* と区別した。

13世紀半ばの第3文法論文は、スノッリの甥で詩人のオウラヴル・ソウルザルソン (Ólafur Þórðarson [Ólafr Þórðarson hvítaskáld] 1210頃～59) によって書かれ、文体論と修辞学 (*málskráðsfræði*) を扱っている。アイスランド語による文法用語を数多く提唱し、*fall*「格」、*fornafn*「代名詞」など今日に残っている例もあり、新造語の先駆けと言える。14世紀に由来する第4文法論文は第3論文の続編である。

このように、アイスランドは中世を通じて独自の文法研究と文学の伝統を備えた唯一の北欧語だった。このことが1500～1800年の衰退期にも、文章語の伝統が生き長らえた原動力になったのである。

2.3. デンマーク支配下の宗教改革と聖書の翻訳

15 世紀を迎えると、1402～04 年に人口の約 3 分の 1 が減少したペストの蔓延、火山の噴火などの自然災害と凶作に見舞われ、国力は下降の一途をたどった。それと平行して強まったのがデンマークによる支配である。アイスランドはすでに 1262 年にノルウェー領となって、長く続いた独立の時代を失い、1380 年以降はデンマークの管轄化に下っていたが、他国支配の影響が顕著になったのは 16 世紀以降である。1410 頃～1530 年代にアイスランド社会に影響を行使していたのは、むしろハンザ同盟 (ド Hanse) の北ドイツ人商人、それにとりわけイギリス人の漁師や商人だった。アイスランドの 15 世紀は「イギリス人の世紀」(enska öldin) とも呼ばれることがある。デンマーク王は 16 世紀前半にイギリス人をアイスランドから駆逐し、支配の手を強めていった。

1541 年には、デンマークの政治的意図で宗教改革 (siðaskipti) が暴力的に断行された。11 世紀以来、アイスランドには南西部のスカウルホルト (Skálholt 1056～1785) と北部のハウラル (Hólar 1106～1801) の 2 箇所にカトリックの司教座 (biskupssetur) が置かれ、1133～1493 年の間に 8 つの修道院 (klaustur) が各地に設けられていた。アイスランド・カトリック教会は抵抗したが、1541 年にスカウホルトはルター派新教に鞍替えするに至り、32 人を数えたカトリック司教の系列は途絶えた。そして、危険を感じて南西部に逃れていたハウラルの司教で、最後のカトリック司教となったヨウン・アーラソン (Jón Arason 1484～1550) は、息子たちとともに 1550 年 11 月 7 日にスカウルホルトで惨殺された。こうしてアイスランドのカトリック教会はルター派新教に改められて、デンマークの管轄下に置かれた。修道院は解散され、その財産はすべてデンマーク王室に渡った。グンナル・グンナルソン (Gunnar Gunnarsson 1889～1975) の小説『ヨウン・アーラソン』(Jón Arason 1930) はこの間の出来事を扱っている。

1602 年にはデンマークの通商権独占 (einokunarverslun) が開始され、アイスランドは他国との通商を全面的に禁止された。これによってアイスランドは独自の経済発展の基盤を失った。この状況は 1787 年まで続き、全廃され

たのは 1855 年のことである。デンマークが絶対王政 (einveldi) に移行した 1660 年の 2 年後、アイスランドはレイキャヴィーク近郊のコウパヴォーグル会議 (Kópavogsfundur) でデンマーク王が絶対君主としてアイスランドに君臨することを容認した。この時点で、政治的・経済的にすべての権力がコペンハーゲンに委ねられることになった。コペンハーゲン留学は高度な学術世界に触れる唯一の機会ともなった。

ただし、宗教改革以前にアイスランド語に最も影響を与えたのは、デンマーク語ではなかった。それは当時のアイスランドの聖職者たちが駆使していたラテン語と並んで、北ドイツの低地ドイツ語 (ド Niederdeutsch) である。1602 年のデンマークによる通商権独占以前、主要な交易相手はハンザ同盟の諸都市であり、文化的模範と仰がれたのはコペンハーゲンよりもロストック (Rostock) などの北ドイツの大学都市だった。宗教改革以降は中・南部の高地ドイツ語 (ド Hochdeutsch) が標準ドイツ語の地位を得ていったが、16 世紀を通じてアイスランド人のデンマーク語能力は低く、ドイツ語能力のほうかはるかに上だった。後述する 1650 年の新約聖書の翻訳と 1584 年の聖書の全訳もドイツ語訳のルター聖書 (ド *Lutherbibel*, 新約聖書訳 1522 年, 全訳 1534 年) からなされた。17 世紀初頭でも、アイスランド人が最も得意としたのはドイツ語だったと言われている。

言語使用の面でも、中世以降、アイスランドではアイスランド語が唯一の公的言語であり続けた。これはデンマーク語が公的役割を独占し続けたノルウェーとは明確に異なる。書籍の印刷もノルウェーの 1643 年より 100 年以上早く、1530 年頃に始まった。これは北部のハウラルの司教座で、上述の司教ヨウン・アーラソンがハウラル印刷所 (Hólaprentsmiðja) を設立したことによる。聖書 (Biblían) の翻訳では、1540 年にオッドゥル・ゴホトスカウルクソン (Oddur Gottskálksson 1515 頃～56) の手による新約聖書 (Nýja testamentið) のアイスランド語訳がデンマークのロスキレ (Roskilde) で刊行された (デンマーク語訳 1524 年, スウェーデン語訳 1526 年)。これは初めてのアイスランド語による印刷本である。言語史の上でも、これ以降を新期アイスランド語 (nýíslenska 1540～) とし、サガ時代以降を中期アイスランド

語(miðíslenska 1350～1540), それ以前を古期アイスランド語(forníslenska ～1350)と区分する(宗教改革期の1550年または1600年を境とする区分もある)。古くは13世紀から、ノルウェー王ホーコン5世(Håkon V. Magnusson 1270～1319(在位1299～1319))の命によって、『スティヨウルトン』(*Stjórn*, 「統治」の意味)と呼ばれる旧約聖書(*Gamla testamentið*)のアイスランド語訳の試みがなされていた。

宗教改革以降, 政治的外圧に抗する精神的自立への志向は, 外来語からの母語の純化と擁護に顕著に現れるようになる。上述の新約聖書訳は低地ドイツ語の要素に満ち, プロテスタント理念普及のために書かれた種々の文書にはデンマーク語的要素が散見された。これにたいして, コペンハーゲン大学に学んだハウラルの主教グヴズブランドゥル・ソルラウクソン(*Guðbrandur Þorláksson* 1541/2～1627)は, 自身が管轄するアイスランド唯一のハウラル印刷所で種々の宗教書籍を刊行し, 外国語的要素を除去して純粋なアイスランド語で神の教えを学び, 説く必要性を力説し, 実践した。1584年には初のアイスランド語完訳聖書として名高い『グヴズブランドゥル聖書』(*Guðbrandsbiblía*)を刊行したが, この点には格別の注意が払われている(デンマーク語訳1550年, スウェーデン語訳1541年)。また, 世俗のリームル詩節の形式を宗教詩に取り入れる試みを牧師エイナル・シーグルソン(*Einar Sigurðsson* 1538～1626)に行わせ, その作品を含む『韻文集』(*Vísnaðók* 1612)を出版した(書名は慣例による簡略表記。以下同様)。

2.4. 17世紀アイスランド・ルネサンスと辞書編集

17世紀に入ると, デンマークの人文主義者の間で「アイスランド・ルネサンス」(*Íslensk endurreisn*)と呼ばれるアイスランド古来の文学的伝統への関心の高まりを見た。古写本の収集への動きも始まった。グヴズブランドゥルの甥で, ハウラルとコペンハーゲンに学んだアルトングリムル・ヨウンソン(*Arngrímur Jónsson* 1568～1648)は, 当代随一の知識人で, 後述するヴォームなどのデンマーク人学者と広く交わり, アイスランドにかんする当時のヨーロッパ知識人の誤謬を正す著作を精力的にラテン語で発表した。「賢

学のアルトングリムル」(Arngrímur lærði)の愛称で親しまれたこの牧師は、アイスランド語を他の北欧語やドイツ語よりも優位に位置づけ、後代の同胞たちに大きな刺激を与えた。

辞書と文法書の刊行もこの時期に始まる。最古のアイスランド語辞書は、マグヌス・オウラフソン (Magnús Ólafsson 1573 頃～1636) の『ルーン文字語彙資料集』(ラ *Specimen lexicæ runicæ*) である。著者の死後、アイスランド・ルネサンスの支持者でデンマーク人学者のオーレ・ヴォーム (Ole Worm 1588～1654) が 1650 年にコペンハーゲンで刊行した。同書は古語を中心に日常語を交えたラテン語との対訳語彙集である。見出し語はルーン文字に続いてラテン語のアルファベットで示され、文例が添えられており、熟語集としての性格が強い。

次に、グヴズムンドゥル・アンドリエソン (Guðmundur Andrússon 1614 頃～54) の『アイスランド語辞典』(ラ *Lexicon Islandicum*, Hið Íslenska Bókmenntafélag 1999 復刊) がある。著者の死後、1683 年にコペンハーゲンで刊行されたが、前著よりも大きく、ラテン語に加えてときにはギリシャ語とヘブライ語の訳語を与え、17 世紀の口語資料として貴重である。

続いて、スウェーデン人のウーロヴ・ヴェレーリウス (Olof Verelius 1618～82) が『古語辞典』(ラ *Index Lingvæ Veteris*) を編んだ。著者の死後、1691 年にウプサラで刊行された小型のアイスランド語・ラテン語・スウェーデン語辞書で、古語を扱っている。この 3 著はアイスランド語に強い関心を寄せた外国人の手で刊行された。

他言語を見出し語とした対訳辞書は 18 世紀に現れる。スカウルホルトの主教ヨウン・アウルトナソン (Jón Árnason 1665～1743) が 1738 年に刊行した約 16,000 語収録の『ラテン語の鍵』(ラ *Nucleus Latinitatis*, Hið Íslenska Bókmenntafélag 1994 復刊) がそれであり、今日まで唯一の刊行されたラテン語・アイスランド語辞書である。ラテン語・ドイツ語辞典に基づいて編まれたラテン語・デンマーク語辞典をもとにしたもので、草稿は 2,092 頁に及ぶ。

ほかにも、北大西洋航海・漁業で重要な役割を果たしたバスク語、東方旅

行家が接したタミール語などとの対訳辞書や語彙集の草稿があり、当時のアイスランド人の旺盛な関心を伝えている。

2.5. 初期の文法記述と文献学研究

最古の文法書は、今日のスウェーデン南部、スコーネ (Skåne) で学校長を務めたリューノウルヴル・ヨウンソン (Runólfur Jónsson 1620 頃～54) による『アイスランド語文法の基礎』(ラ *Grammaticæ Islandicæ rudimenta*) である。ラテン語で書かれ、ヴォームの尽力で 1651 年にコペンハーゲンで刊行された。当時の現代語を記述し、最古の北欧語の文法書でもある。母音を 5 種類、格を 6 種類とするなど、ラテン語文法の規範に従っている点が多い。類書の出現は、デンマーク語では 1668 年のポントピダンによる『デンマーク語文法』(Erik Pontoppidan: *Grammatica Danica* (ラ)), スウェーデン語では 1696 年のヒェルマンによる『スウェーデン語文法』(Nils Tiällman(n): *Grammatica Suecana äller Enn Svensk Språk ock Skrift-konst* (ラ/ス)), ノルウェー語ではずっと遅れて 1848 年のオーセンによる『ノルウェー語文法』(Ivar Aasen: *Det norske Folkesprogs Grammatik* (ノ)) が最初である。したがって、著者リューノウルヴルは直接の模範を欠いていたことになる。北欧語初の体系的文法記述がアイスランド語でなされたのは、偶然ではない。アイスランド語は古来の姿を忠実に伝える言語として、海外の学者の注目を集めつつあった。アイスランドの知識人はそれを誇りとし、それに応える意図を持っていた。リューノウルヴルも同様であり、同書は 1688 年と 1703 年にオクスフォード、1806 年に縮約版がスウェーデンのルンドで再版された。

1736～37 年頃には、ヨウン・オウラフソン・フラウ・グルンナヴィーク (Jón Ólafsson frá Grunnavík 1705～79) が同じく共時的立場から未完の『アイスランド語文法』(*Íslensk málfræði*) を残している。希求法を認めるなど、やはりラテン語文法に従っている点が多い。ヨウンは後述するアウルトニ・マグヌソンの書記を務め、1735 年頃に『簡約アイスランド語教本』(デ *Kort Undervijsning om de fornemste stycker, til at læse og tale det Islandske sprog rett*) を著した。未刊行だが、最古の外国人向けの実用的なアイスラン

ド語教本である。デンマーク語で書かれたのは、ヨウンがコペンハーゲンで活動し、特定の個人向けに書かれたためと推察されるが、当時としてはまったくの例外だった。ヨウンはアイスランド語について最初の語源的考察も行ない、正書法を論じた初の草稿を残している。グルンナヴィークのヨウン (Grunnavíkur-Jón) の業績は未刊行のものが多く、ヨウン・ヘルガソン (Jón Helgason 1899～1986) の1926年の博士論文で広く知られるようになった。

文法記述の大きな進展は、ヨウン・マグヌソン (Jón Magnússon 1662～1738) の『アイスランド語文法』(ラ *Grammatica Islandica*, Háskólaútgáfan 1997 復刊) による。広範囲の文法事項を豊富な用例を交えて扱い、それまでの類書と違ってラテン語文法の枠組みに縛られず、共時的な観点から当時のアイスランド語の構造記述の試みを行った。4種類の格、現在と過去の2種類の時制、単数・複数の主格語尾による名詞変化の分類など、初めて正しい形態論的扱いをしたのもその功績である。ただし、動詞の強変化と弱変化の区別はしておらず、この点ではリュエノウルヴルのほうが先んじていた。同書はフィンナル・ヨウンソンの著書『1800年頃までのアイスランド語文法の歴史』(デ *Den islandske grammatiks historie til o. 1800*) の一部として、1933年に出版された。

後述するラスク以前にアイスランド語の総括的な文法書を残したのは、以上の3人しかいない。どれも形態論と音論だけを扱い、1冊を除いてラテン語で書かれ、ラテン語文法の規範からアイスランド語の文法記述を模索する試みだった。特筆に価するのは、すべて当時の言語の記述で、古語の文法ではない点である。ただし、古語の資料が乏しかった当時、古語 (norraena) と当時の現代語 (íslenska) の相違を著者たちは十分に意識していなかったと考えられる。この時期のアイスランド語文法は、辞書と同様に外国人向けにおもにラテン語で書かれ、学問的性格と実用的性格を併せ持っていたと言える。

深い知識に裏づけられた古語の緻密な文献学的研究は、アウルトニ・マグヌソン (Árni Magnússon 1663～1730) によって礎が築かれた。コペンハーゲン大学に学んだアウルトニは1701年に同大学の哲学・考古学教授に就任し、古写本の研究に従事した。1702～12年にはアイスランドに長期滞在し、

膨大な古写本を収集して、卓越した学識を駆使して古語の原典研究を行った。それ以前に刊行されたサガの数はわずかで、古語の研究はこれを契機に盛んになった。惜しくも 1728 年 10 月のコペンハーゲンの大火災で収集資料の 3 分の 2 が灰となったが、最古期の写本は幸い延焼を免れた。アウルトニの死後、全資料はコペンハーゲン大学に寄贈され、後述のラスクの寄贈分を含めると、写本総数は約 2,800、それに多数の古文書が加わる。今日、その名を冠したコペンハーゲンの「アルナマグネア研究所」(Det Arnarnagnæanske Institut 1957～)とレイキャヴィークの「アウルトニ・マグヌソン研究所」(Stofnun Árna Magnússonar 1962～)が両国の首都に置かれ、代表的な古アイスランド語文献資料研究機関となっている。アウルトニはまた、古語の理解を容易にすることを意図して、未刊行の『正書法』(*Réttritin*)で当時の現代語と古語を融合させた古風な正書法を提唱し、以後、影響力を持った。ハルドウル・ラハスネスは名作『アイスランドの鐘』(*Íslandsklukkan*)の中で、アウルトニを 18 世紀の暗黒時代にアイスランド人のアイデンティティを代表する写本収集家として描いている。

2.6. バロック文学と宗教詩——『受難詩篇』と『ヴィーダグリーン説教集』

ヨーロッパ大陸からバロック文学が伝えられた 17 世紀は、すぐれた宗教詩を生んだ。その代表者は、ハウラルに生まれた牧師ハトルグリムル・ピエートウルソン (Hallgrímur Pétursson 1614～74) である。北ドイツとコペンハーゲンで学んだが、けっして平穏な生涯を送ったわけではない。アルジェリアの海賊から 9 年間の拘束の後^{めと}に解放された同胞たちを慰労する役目を与えられ、その中から 16 歳年上の人妻を娶って子供をもうけ、非難を浴びた。西部の教区牧師として過ごした晩年には、ハンセン氏病を患って失明した。

『時代精神』(*Aldarhátur*)のような世俗的な詩のほか、とくに名高いのはドイツの宗教詩人パウル・ゲールハルト (Paul Gerhardt 1607～76) などの影響を受けて、真摯な宗教的教育理念に満ちた 50 編から成る『受難詩篇』(*Passíusálmur* 1666) である。同書は何十回も版を重ね、人々に深い慰めを与え続けた。代表的な現代詩人ステイトン・ステイナル (Steinn Steinarr

1908～1958) は、1946 年に『受難詩篇第 51』(*Passíusálmur nr. 51*) を書いている。次に、グヴズムンドゥル G. ハーガリーン (Guðmundur G. Hagalín 1898～1985) の短編『肝っ玉母さんの話』(*Móðir barnanna*) にも登場する有名な葬送歌を紹介しよう。『受難詩篇』に添えられた『死の未知の時について』(*Um dauðans óvissan tíma*) と題する全 13 節の冒頭で、ソウルベルグル・ソウルザルソン (Þórbergur Þórðarson 1888～1974) は『花の詩篇』(*Sálmurinn um blómið*) と呼んだ。原文では 2 つの短詩行が 1 つの長詩行のまとまりを作り、それを 4 つ重ねて 1 節のまとまりを構成している。そして、そのために、1 行おきの脚韻と並んで、語頭の任意の母音または同一子音の反復による 2 行単位の頭韻を踏んでいる(子音では *fagurt...frjóvgun, fyrst* の *f*, *lit...lagði, líf* の *l* など)。原文は今日の正書法に修正して示す。

野に咲く花の枯れるがごとく (抄) ハトルグリムル・ピエトウルソン
(*Allt eins og blómstrið eina* Hallgrímur Pétursson)

野に咲く花のひとつと	Allt eins og blómstrið eina
平らかの地にて	upp vex á sléttri grund
清らに実り麗しく	fagurt með frjóvgun hreina
明けの時を迎えしが	fyrst um dags morgunstund,
^{まばた} 瞬く暇も無かりして	á snöggu augabragði
早々と刈り取られ	af skorið verður fljótt,
色汁ともに絶ゆるが如く	lit og blöð niður lagði,
枯れゆく定め 人の世もまた	líf mannlegt endar skjótt.

18 世紀にまたがるが、アルトングリムル・ヨウンソンの孫でスカウルホルトの主教ヨウン・ヴィーダグリーン (Jón Vídalín 1666～1720) は、コペンハーゲン大学から神学の学位を得た第一級の知識人だった。その『ヴィーダグリーン説教集』(*Vídalínspostilla* 1718～20) は家庭説教集 (*húspostilla*) として広く親しまれた。深い精神性に満ちた『受難詩篇』と倫理的・実践的性格の

『ヴィーダリーン説教集』は、人々の血肉となった代表的な宗教書である。

バロック文学の世俗面を代表するのは、前述のエイナル・シーグルソンの孫のステーフアウン・オウラフソン (Stefán Ólafsson 1619 頃～88) である。コペンハーゲン大学で前述のヴォームに師事し、その勧めで『スノッリのエッダ』(Snorra-Edda) や『巫女の予言』(Völuspá) のラテン語訳を手がけた。東部のヴァトラネース (Vallanes) で牧師を務めながら、酒、タバコ、乗馬に親しむ様子を詩にうたい、恋愛詩も作った。しかし、40 歳で病を得て、自伝的な『白鳥の歌』(Svanasöngur) 以降は真摯な内容の作品が増えていった。

伝承文学の分野では、題材の範囲を民衆本や民話に拡大したリームルのほかに、新しい詩の形式として「ヴィーキヴァーキ^{うた}の詩」(vikivakakvæði) が現れた。これは男女が手を取り合って体を前と横に揺らして踊る輪舞、「ヴィーキヴァーキ」(vikivaki) に添えた歌にさかのぼる。16 世紀後半から 17 世紀にかけて盛んになり、リフレイン詩句 (viðkvæði) と各詩節の後に添えられた挿入詩句 (viðlag)、ケンニングと韻の多用を特徴とする。

2.7. 暗黒の 18 世紀

18 世紀はアイスランドの暗黒時代である。1707～09 年には天然痘の大流行で住民の 4 分の 1 から 3 分の 1 が死亡し、5 万人を越えた人口は約 33,000 人に激減した。1751～59 年の飢饉では約 6 千人が犠牲になった。1783 年 6 月 8 日から翌年 2 月にかけては、ラーキ火山 (Laki) の大噴火 (Skaftáreldar) と地震で 500～600 平方キロに及ぶ有史以来、最大規模の溶岩流が大地を覆った。ヨーロッパ全域に舞い、アジアにも達した火山灰は霞のようにアイスランドの空を覆い尽くし、厳寒の冬と「霞の大飢饉」(móðuharðindi 1784～85) が続いた。全島の羊の約 82%、馬の約 77%、牛の約 53% が死滅し、後述するグヴズムンドゥル・フリジヨウンソンの短編『古い干し草』(Gamla heyið) にあるように、深刻な被害が蔓延した。犠牲者は人口の約 4 分の 1 にあたる約 1 万人に達した。5 万人近くまで回復していた人口は 1785 年には約 4 万人、翌年には 3 万 8 千人余りに落ち込んだ。デンマーク本国としても、生き残った全アイスランド住民をユラン (ユトラント) 半島北部へ移住させるこ

とを検討したほどである。

没年に完成した文化史的に重要な『牧師ヨウン・ステイングリムソン自叙伝』(*Æfisaga séra Jóns Steingrímssonar*) で知られるヨウン・ステイングリムソン(Jón Steingrímsson 1728~91)は、『炎の書』(*Eldrit*)でこの間の様子を伝えている(両書は20世紀に刊行された)。1783年7月20日、礼拝の最中に噴火は起こり、人々が逃げ惑う中、荒れ狂う溶岩流はヨウンが懸命に祈りを捧げる教会の手前で止まったと伝えられている。この礼拝は「炎の礼拝」(eldmessa)と呼ばれ、ヨウンは「炎の牧師」(eldklerkur)と称えられて、人々の心の支えになった。後述する自然主義作家ヨウン・トレイスティはヨウンの記録をもとに、歴史小説の大作を書いている。

1786年、デンマーク王はアイスランドの中心地とするべく、レイキャヴィークに町としての設立認可を与えた。同地は874年の植民以来、一介の教区教会の所在地にとどまり、小村としての体裁をとり始めたのは、1751年にデンマーク王が経済振興計画(Innréttingar)の一環として織物工場を設置したことによる。これは「レイキャヴィークの父」(faðir Reykjavíkur)と呼ばれるアイスランド人初の財務官(landfógeti)、スクーリ・マグヌソン(Skúli Magnússon 1711~94)の努力による。これによってレイキャヴィークは今日の首都となる下地を得たが、それでも経済的にはなかなか発展しなかった。

1800年には、久しく権限を制限されていたとはいえ、930年に創設され、自由と民主主義の象徴だったシングヴェトリルの国民議会、アルシングが廃止された。それに代わって、高等裁判所(Landyfirrættur)がレイキャヴィークに設けられた。1785年の地震で廃墟と化した南部のスカウルホルトの主教座も、この地に移された。1801年には北部のハウラルの主教座が廃止され、両者は人口300人余りのこの新興の町に統合移転された。

17世紀末から18世紀初頭にかけて、デンマーク語の影響は法律制度や行政面で圧倒的となり、アイスランド語は公的な力を失っていった。ノルウェー王の庇護に下ったアイスランドでは、1280年に法律家ヨウン・エイナルソン(Jón Einarsson 1230頃~1306)がノルウェーからもたらし、翌年にアルシン

ギで採択された『ヨウンの書』(*Jónsbók*) が法的秩序を規定していた。しかし、1696 年以降は、アルシングの議事録は通常、デンマーク語で公開されることになった。1736 年以降は、裁判官と法律家がコペンハーゲン大学で法律試験に合格することを義務づけられた。1751 年にはすべての法律をアイスランド語とデンマーク語で公布する旨の布告がなされ、デンマーク語だけで行われることもあった。1760 年代以降は、デンマーク人商人がアイスランドで越冬するのが慣例になった。1490 年のアルシングの決定で、海外の商人は夏季に取引を限定され、冬季の滞在は禁じられていたのである。アイスランドに常駐するデンマーク人高官は稀だったが、アイスランド人高官は公的書類をデンマーク語で作成するようになった。スヴェイトン・セルヴァソン (Sveinn Sölvasson 1722~82) のように、デンマーク語の借用語を法律用語に使用することを奨励する者もいた。なかにはスカウルホルトの教師ビャルトニ・ヨウンソン (Bjarni Jónsson 1725~98) のように、ノルウェー語とフェーロー語の状況にならって、アイスランド人はアイスランド語を捨て、デンマーク語を用いるべきだと主張する者さえ現れた。18 世紀前半にアイスランドの文化は最悪の事態を迎え、他の北欧諸国の後塵を遠く拝することになった。

2.8. 啓蒙主義時代の言語擁護と文学

18 世紀半ば近くになると、他のヨーロッパ諸国よりも遅れて、1750 年頃に啓蒙主義 (upplýsingarstefna) の風が到達する。その洗礼を受けて、最悪の状況にありながら、熱烈な祖国愛から人民の教化と古語復興運動を情熱的に実践したのが詩人・自然史家エッグェルト・オウラフソン (Eggert Ólafsson 1726~68) である。コペンハーゲン大学で百科全書的精神からさまざまな学問を修めたエッグェルトは、デンマーク王立アカデミーから 1752~57 年にアイスランド全土の自然・経済調査をもうひとりの若いアイスランド人研究者とともに命じられた。その成果は死後の 1772 年にデンマーク語で公にされ、英独仏語に訳されて、アイスランドとその住民についての初の本格的な総合的記述となった。エッグェルトはまた、3 巻本の『農耕の詩』(*Búnaðarbálkar*

1756～64)など、教化的な詩集を発表するかたわら、未刊行ながら1762年に『正書法の書』(*Réttritolabók*)を著して、古語を厳格な模範とする文章語の確立を訴えた。前述の「第1文法家」が提唱した á, ó, ú の文字を初めて導入し、標準発音の提案も行っている。同書はアイスランド語改革の最初の試みと言われ、何度も筆写されて流布した。後年、要職を託されて祖国に戻り、妻帯したエグギェルトは、西部の故郷の新居に向かう途上で海難事故に遭い、新妻とともに命を絶った。

この時代には、前述のヨウン・ステイングリムソン牧師のほかに次の作家たちがいる。ヨウン・ソルラウクソン (Jón Þorláksson 1744～1819) は、後述するヨナス・ハトルグリムソンにも影響を与えた斬新な詩人で、ミルトンの『失樂園』やドイツのクロプシュトック (Friedrich Gottlieb Klopstock 1724～1803) の『救世主』(ド *Messias*)などを翻訳した。ヨウンは後述するスヴェインビェルトン・エイイルソン (Sveinbjörn Eignilsson), ステイングリムル・トルステインソン (Steingrímur Thorsteinsson) に連なるヨーロッパ文学伝道者の先駆者的存在である。

地方裁判所長を務めたシーグルズル・ピェートウルソン (Sigurður Pétursson 1759～1827) は、劇作家の先駆者として重要である。コペンハーゲン大学に学んで喜劇作家ホルベア (Ludvig Holberg 1684～1754) の影響を受けて、2作の喜劇『フロウルヴル』(*Hrólfur*, 男性名で「名高い狼」(*hróðúlfur*)の意味, 1819 出版)と『ナルヴィ』(*Narfí*, 男性名で「愚か者」の意味, 1846 出版)を残した。ホウラヴェトルル (Hólavöllur) のラテン語学校の生徒が初演したが、当時はほとんど影響を与えず、19世紀末まで後継者を見なかった。

2.9. 啓蒙主義団体の設立

1779年、コペンハーゲン在住の12人のアイスランド人学生が「アイスランド学術協会」(Hið íslenska Lærdómslistafélag 1779～1818)を設立し、政府高官で古語研究者のヨウン・エイリクソン (Jón Eiríksson 1728～87)を初代会長に選出して母語復興運動を開始した(ヨウンは「霞の大飢饉」など

難題の山積に行き詰まり、後に自ら命を絶った)。雑誌『アイスランド学術協会誌』(*Rit þess íslenska lærdómslistafélags* 1781～98) を 15 巻刊行している。アイスランドには 1773 年に 2 番目の印刷所が置かれるまで、ホウラルに印刷所があるだけで、刊行物は宗教文献に限られていた。前述の辞書や文法書がコペンハーゲンなどで刊行されたのは、そのためである。同誌はその不備を補う多方面の論考を掲載し、新造語について言語政策の必要性を宣言し、実践した。

1794 年には、アイスランドで同様な目的を掲げた「アイスランド国民啓蒙協会」(*Hið íslenska Landsuppfræðingarfélag* 1794～1827) が設立された。アルシングに代わって 1800 年に設置された高等裁判所の初代高等裁判官で、代表的な啓蒙主義者マグヌス・ステッフエンセン *Magnús Stephensen* (1762～1833) とその父を発起人とする。アイスランド語によるアイスランド初の雑誌『主要広報』(*Minnisverð tíðindi* 1796～1808) を発行し、一時は 1,200 名の賛助会員を数えた。しかし、マグヌスの独断が強まり、ヨーロッパ大陸文化と社会体制への追随を目指したため、国民主義の高まりの中で解体した。

2.10. 19 世紀ロマン主義とデンマーク人言語学者ラスクの研究

1810 年代にはヨーロッパ大陸からロマン主義 (*rómantík*) の思潮が流入し、言語の起源への関心が高揚した。民族の精神的根源を探る歴史的研究が盛んになり、国民主義 (ナショナリズム) の意識が覚醒された。アイスランドでは言語擁護が国民主義と強く結びつき、その後の歴史を彩ることになった。

その先鞭をつけたのは、アイスランド人ではなく、デンマークの言語学者ラスムス・ラスク (*Rasmus Rask* 1787～1832) である。歴史比較言語学およびゲルマン語学創始者のひとりであるラスクは、1811 年に『アイスランド語あるいは古ノルド語への手引き』(*De Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog*) をデンマーク語で著した。ラスクはアイスランド語文法書の著者としては 4 人目で、外国人としてもラテン語以外で古語の文法

を書いた点でも前例がない。今日の常識とは異なっており、アイスランド語を北欧諸語の「祖語」と考えていたラスクは、デンマーク人に向けて豊かな古語の文学に近づくために、アイスランド語学習の重要性を説いた。同書はラテン語文法の規範から自由な初の本格的なアイスランド語文法記述として名高い。ラスク自身がとくに重視したのは、第3章の語形成である。言語は屈折語尾を失っても、不変化詞などでその文法的機能を補うことができるが、新しい語を創造する術を失えば、他言語から盲目的に語彙を受け入れる必要に迫られ、衰退を余儀なくされるという見解をラスクは持っていた。これは豊富な屈折語尾の保持を尊び、その摩滅を墮落とみなす当時の片寄った進化論的学説とは一線を画す卓見である。この考え方は19世紀前半の新造語を中心とするアイスランド語純粹主義運動(hreitungustefna)の牽引力ともなった。同書は1818年の著者自身によるスウェーデン語訳と没年の1832年の縮約版『古ノルド語あるいは古アイスランド語への簡約手引き』(デ *Kortfattet Vejledning til det oldnordiske eller gamle islandske Sprog*)とともに、19世紀を通じて類書の模範となった。

ラスクはまた、ビェルトン・ハルドウルソン(Björn Halldórsson 1724~94)の遺稿にデンマーク語訳を補い、1814年に『アイスランド語・ラテン語・デンマーク語辞典』(ラ *Lexicon Islandico-Latino-Danicum*, Orðabók Háskólans 1992 復刊)として出版した。約3万語を収録した同書は18世紀の口語をモダンな観点から収録し、最初の近代アイスランド語辞書となった。1818年には前述の『第1文法論文』を編集・出版した。さらに、同年の懸賞論文『古ノルド語あるいはアイスランド語の起源についての研究』(デ *Undersøgelse om det gamle Nordiske eller Islandske Sprogs Oprindelse*)では、アイスランド語とギリシャ語・ラテン語の親縁関係を音韻対応によって証明し、「ゲルマン語子音推移」(germönsk hljóðfærsla)または「グリムの法則」(ド Grimmsches Gesetz)につながる印欧語比較言語学史上の重要な発見をした。

ラスクの研究はデスクワークにとどまるものではなかった。1813~15年には現代アイスランド語習得のためにアイスランドに滞在したが、当時、300人

ほどの人口で、最大の中心地だった新興のレイキャヴィークで目の当たりにしたのは、デンマーク語の氾濫だった。ラスクは、このままで行けば、アイスランド語は 100 年後にはレイキャヴィークで使われなくなり、200 年後にはアイスランド全土で滅亡するだろうという強い危機感を抱いた。アイスランド語をほとんど母語のレベルにまで習得したラスクは島内各地を広く訪れ、母語への誇りと擁護を訴え、人々から広く敬愛された。後述する自然主義の詩人ソルステイトン・エルトリングソンは、デンマークを批判した『ラスク——1887 年の生誕百年祭に寄せて』と題する詩でその努力を賞賛している。ラスクはまた、当時、停滞気味だった「アイスランド学術協会」と「アイスランド国民啓蒙協会」の 2 つの啓蒙主義団体に代わって、コペンハーゲンとレイキャヴィークに本部を置く「アイスランド文学会」(Hið íslenska bókmenntafélag 1816～) の設立を主導し、初代会長に就任した (1912 年以降、本部をレイキャヴィークに統合)。そして、北欧最古の学術雑誌『スキルトニル』(*Skírnir* 1827～, 「洗礼」の意味) の創刊に尽力し、今日のアイスランド語学文学の礎を築いたのである。

3. ロマン派文学の開花——近代アイスランド文学の夜明け——

3.1. ヨウン・シーグルソンと独立運動の開始

1848 年の革命の翌年、立憲君主制に移行したデンマークの対外権力が衰えるとともに、アイスランドの国力は回復していった。1845 年にはアルシングが諮問機関として復活した。審議はアイスランド語だけでなされるようになり、デンマーク語の公的使用は急速に後退した。教会でも同様である。1854 年には、1602 年以來のデンマークによる通商独占権が完全な形で解かれた。独立への要求は急速に高まり、1874 年の建国千年祭には、歴代のデンマーク王として初めてアイスランドを訪れたクリスチャン 9 世 (Christian IX. 1818～1906, 在位 1863～1906) が列席して、アイスランドに憲法を与えた。こうしてアルシングに制限つきの立法権が認められ、商業組合も結成された。

この一連の改革を主導したのが独立運動 (sjálfstæðisbarátta) の父、ヨウン・シーグルソン (Jón Sigurðsson 1811~79) である。険しい山地とフィヨルドに挟まれた北西部のイーサフィヤルザルシスラ (Ísafjarðarsýsla), アルトナルフィエルズル (Arnarfjörður) のフラフセイリ (Hrafnseyri) に生まれ、コペンハーゲンで文書館員として勤めながら、アイスランド人学生のサークルの指導者として頭角を現した。前述のマグヌス・ステッフエンセンと同様にヨーロッパ啓蒙主義を奉じて、コペンハーゲンで雑誌『新社会誌』(Ný félagsrit 1841~73) を創刊した。1845 年以後はアルシングのメンバーを務め、政治的要職を歴任し、すぐれた理性と現実感覚を駆使して、コペンハーゲンでアイスランドの地位を高める運動を組織的に展開した。ヨウンの誕生日の 6 月 17 日は 1944 年以來、独立記念日として祝日になっている。ハルドウル・ラハスネス (Halldór Laxness 1902~98) の『新しいアイスランド』(Nýja Ísland, 今日の正書法は Nýja Ísland) にも、北米に移住したアイスランド人一家が新居の壁にその肖像を飾るくだりがある。

3.2. 雑誌『フィエルニル』の創刊

アイスランドにヨーロッパの新思潮を伝え、独立運動の牽引力となったもうひとつの雑誌が 1835 年にコペンハーゲンで創刊された『フィエルニル』(Fjölnir 1835~39, 43~45, 47) 全 9 巻である(「知恵豊かな者」の意味で北欧神話の主神オージン (Óðinn) の別称)。「フィエルニル」の創始者 (Fjölnismenn) はコペンハーゲン大学の 4 人のアイスランド人学生で、政治思想家・神学者トマス・サイムンソン (Tómas Sæmundsson 1807~41), 法律家ブリニョウルヴル・ピェートウルソン (Brynjólfur Pétursson 1810~51), 後述する自然科学者・詩人ヨウナス・ハトルグリムソン, 言語学者コンラウズ・ギスラソンである。同誌は言語学, 自然科学, 政治学, 法律学, 経済学など多方面の論考を掲載した。啓蒙主義を標榜したが, 実利優先に終始せず, ヨウナスを中心にロマン派の詩, 小説, 翻訳も紹介し, ロマン派文学をアイスランドに定着させた。啓蒙主義とロマン主義という相反する概念の混在が『フィエルニル』の特色である。これは, 経済的困窮と政治的独立への希求が

ロマン主義の性格を現実からの乖離から遠ざけた結果と言える。

同誌はアイスランド語浄化運動と規範確立にも重要な貢献を残した。その中心人物は、1853～86年にコペンハーゲン大学の古アイスランド語学教授を歴任したコンラウズ・ギスラソン (Konráð Gíslason 1809～91) である。同誌はヨウナスを中心に自然科学の新造語を多数生み出したが、コンラウズは古語を模範とする立場から原稿を厳密に校閲し、書評も数多く執筆した。デンマーク語の借用語と低地ドイツ語の統語法を排し、語形変化を正して古語の状態に戻す提言も行い、一部は今日の規範になっている。学校教育を念頭に置いて、古語を基盤とする正書法も提唱した。『デンマーク語・アイスランド語辞典』(*Dönsk orðabók með íslenskum þýðingum* 1851) も編集し、『古アイスランド語・英語辞典』(R. Cleasby/G. Vigfusson: *An Icelandic-English Dictionary* 1874, 第2版 1957) でも実質的な執筆者として大きな足跡を残した。コンラウズはアイスランドが生んだ最初の近代的言語学者である。前述のように、ラスクは先達たちと同様に、アイスランド語の古語と現代語の相違を明確には意識していなかった。ラスクの孫弟子でもあったコンラウズは、『古アイスランド語の基本的特徴』(*Um frumþarta íslenzkrar tungu í fornöld* 1846), 『古ノルド語形態論』(*De Oldnordisk formlaere* 1858) でこの誤謬を正し、『最古のルーン碑文の言語的位置』(*De ældste Runeindskrifters sproglige Stilling* 1869/71) においてこの誤謬を正し、アイスランド人として最初の比較言語学的研究を行った。

3.3. ヨウナス・ハトルグリムソン — ロマン派の代表的国民詩人

ヨウナス・ハトルグリムソン (Jónas Hallgrímsson 1807～45) は近代アイスランド叙情詩に生命を吹き込んだロマン派の代表的詩人であり、アイスランドの国民詩人 (þjóðskáld) である。北部のエイヤフィヤルザルシスラ (Eyjafjarðarsýsla), 中心地アークルエイリ (Akureyri) に近いエヘスナダールル (Öxnadalur) のフレイン (Hraun) で貧しい家庭に生まれた。前述のヨウン・ソルラウクソンのもとで助任牧師を務めた父親は9歳のときに亡くなり、恵まれない少年期を過ごした。1829年にレイキャヴィーク近郊のベッサ

スタージル (Bessastaðir) のラテン語学校を卒業すると、32～37 年にコペンハーゲン大学に学び、法律学から自然科学に転じた。1837 年と 39～42 年には自然調査のためにアイスランドに戻り、健康の悪化の中で島内各地を回ったが、この体験がその詩に特徴的な美しい自然描写の素地を作った。そのほかはコペンハーゲンで暮らし、調査の報告をまとめながら病を得て夭折した。作品や論考はおもに『フィエルニル』に掲載され、死後の 1847 年にアイスランド文学協会が出版した『詩集』(*Ljóðmæli*) にまとめられた。1883 年には散文作品を加えた『詩集と他の作品』(*Ljóðmæli og önnur rit*) が自然主義作家で政治家のハネス・ハフステインの手で出版された。1929～37 年には『作品集』(*Rit*) として全集が編まれた。主要作品と解説については、ウィスコンシン大学のリングラー教授 (prof. Dick Ringler) のサイト参照 (www.library.wisc.edu/etext/Jonas)。

ヨウナスの詩は自然な話し言葉に新造語を織り交ぜ、透明感と柔軟性に富む瑞々しさ^{みずみず}を湛えている。早世したために作品は多くないが、近代的な文学言語としてのアイスランドの可能性を開拓した功績は、比類なく重要である。ヨウナスはまず、愛国詩 (*ættjarðarkvæði*) を通じて人々の独立心を鼓舞し、国民意識を高めた。『フィエルニル』の創刊号のトマス・サイムンソンによる綱領宣言に続く『アイスランド』(*Ísland*) や『グンナルの小島』(*Gunnars-hólmur*) がその例である。後者は『ニャールのサガ』(*Brennu-Njáls saga*) の英雄グンナル (Gunnar) が殺人罪に問われ、兄弟 2 人で 3 年の流刑に赴く途上、故郷の自然の美しさに心を打たれて帰還し、死を選ぶ経過を美しい自然描写を交えてうたったものである。後述するロマン派詩の先駆者ビャルトニ・トウラレンセンは、この詩を目にして「私はもう詩作をやめよう」と語ったという逸話がある。ヨウナスの詩の特徴のひとつは巧みな自然描写にあるが、ビャルトニの作品のように人間を精神的に教化する峻厳さとは対照的に、流麗さと晴朗さにあふれている。

もうひとつのジャンルはロマン派的な恋愛詩 (*ástarkvæði*) である。この点で最も影響を受けたのは、ドイツのハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine 1797～1856) である。ヨウナスは『フィエルニル』の創刊号で、「ヒンリク・

ハイニ」(Hinrik Hæni)として初めてハイネを紹介した。ただし、ハイネ独特の諧謔^{かいぎやく}さはそれほど見られず、もうひとりの大きな影響を受けたデンマークの作家アンデルセン(アナスン, Hans Christian Andersen)に似て、純真な優美さが印象的である。少年期に少女と体験した花咲く野原への旅の思い出をつづった『旅の果て』(*Ferðalok*), ドイツの文豪ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe 1749~1832)の『恋人の傍らで』(ド *Nähe des Geliebten*)を連想させる『悲哀』(*Söknuður*)などが有名である。

それでは次に、『アウスタ―愛する母語』を紹介しよう。言葉を発する以前の幼い娘に母語をたとえ、「愛」(ást)を連想させる女性名アウストリズル(Ástriður)の愛称「アウスタ」を冠してうたった作品である。原文では2つの短詩行が1つの長詩行のまとまりを作り、それを4つ重ねて1節のまとまりを構成している。ただし、古ゲルマン語詩の伝統にならって脚韻は踏まず、語頭の任意の母音または同一子音の反復による2行単位の頭韻を踏んでいる(子音では *blíð*...*barni*, *brjósti* の *b*, *heimsaugað hreina*, *helgasta* の *h* など)。

アウスタ ― 愛する母語 ヨウナス・ハトルグリムソン
(Ásta Jónas Hallgrímsson)

心和 ^{なご} ます最愛のことば	Ástkæra, ylhýra málið,
どんな声にもまして麗しく	og allri rödd fegra,
白鳥のように白い母の胸元で	blíð sem að barni kvað móðir
幼 ^{おきなご} 子に歌い聞かせたように優しく	á brjósti svanhvítu,
昔のまま 今もお私に	móðurmálið mitt góða,
語りかけ 喜びを恵み与える	hið mjúka og ríka,
穏やかで 豊かな	orð áttu enn eins og forðum
かけがいのない母語	mér yndið að veita.

アウスタ わかるか おまえを今 Veistu það, Ásta, að ástar

愛に満ちた日の光が ^{はぐく} 育み	þig elur nú sólin?
いとも聖なる空の星が	Veistu að heimsaugað hreina
おまえの顔を奥深く	og helgasta stjarnan
心の ^{ひだ} 襷まで明るく照らして	skín þér í andlit og innar
^{けが} 穢れを知らないこの世の ^{まなこ} 眼が	albjört í hjarta,
おまえの命となることばを	vekur þér orð sem þér verða
おまえの口元に呼び起こすのを	vel kunn á munni?
愛しい子 わかるか 私の命が	Veistu að lífið mitt, ljúfa,
ひとえにおまえの唇に宿のを	þér liggur á vörum?
至福に満ちた愛のことばが	Fastbundin eru þar ástar
そこに固く閉ざされているのを	orðin blessuðu.
アウスタ 幼い娘 そこから	Losa þú, smámei, úr lási,
小さな ^{とりこ} 虜を自由にしておくれ	lítinn bandingja!
それで 別の虜たちも解き放たれ	Sannlega sá leysir hina
幸せが私に訪れるだろうから	og sælu mér færir.

散文作品はわずかだが、文学史的に重要なのは短編『苔摘みの旅』(Grasferð)である。アイスランドの苔(ラ cetraria islandica)は薬に用いたほか、麦に代わる食料として採取する習慣があった。腹違いの13歳の弟と2歳年上の姉が苔を摘みに出かける様子を描写したもので、ふたりが夢や希望を語る対話を中心に詩の一節の引用を交え、美しい自然描写が印象的な夢のような詩的散文である。ただし、プロットというべきものは乏しく、通常の意味での物語としての完成度は低い。1836年に書かれたとされるが、ヨウナスは生前、散文作品は発表しなかった。死後、1847年に『フィエルニル』に掲載されると、人々は『断片』(Brot)と呼び、未完の作品と考えた。今日では、サガの文体から脱して同時代に題材を取り、少年少女を主人公として心理描写を取り入れた最初の近代的な短編小説(smásaga)とみなされている。作品中にはデンマークのエーレンスレーヤ(Adam Oehlenschläger

1779～1850) とドイツのシラー (Friedrich von Schiller 1759～1805) の詩に言及する部分があり、当時のヨーロッパ文学の影響がうかがえる。姉はシラーの詩を訳したことになるが、10代前半の子供がデンマーク語やドイツ語の原文に親しみ、文学談義を交わすというのは驚きである。さらに意外なのは、果物の包み紙に姉の詩作品が見つかり、詩作をしていたことを姉が女性に不相応な行為と感じて赤面し、弟に秘密にしてほしいと頼む場面である：「私がそんなこと (=詩作 að yrkja) をしているって、回りの人に知られたらいやよ。それが女の人にふさわしいなんて、思われたためしがないから」 („Mér er ekki mikið um það breiðist út, að ég sé að fást við þess háttar; það hefur aldrei þótt mikil þýði á kvenfólki.“)。新ロマン派の女流詩人フルダ (Hulda 1881～1946) はこの台詞に衝撃を覚え、自身が詩作を試みたときに羞恥心を感じたと告白している。文献学者シーグルズル・ノルダルは学校教育で広く使用された『アイスランド語読本』にこの作品を収録するにあたって、姉弟の文学対話の部分すべてを削除した。原文では、弟は姉をなだめ、自分が書いたことにするから、もっと詩作を試みるべきだと言いつ添えている。今日ではヘルガ・クレス (Helga Kress) などの研究から、これはロマン派的諸譚の表現であり、ヨウナスの真の意図は、伝統的な男性中心の文芸活動の社会通念にたいする批判にあったと解釈されている。短編小説は他のロマン派の作家も試みたが、成功せず、後述する自然主義作家たちによって 1880 年代以降に発展を見た。

ヨウナスはアンデルセンの童話をいくつか翻訳しているが、創作童話も少なくとも 2 編残している。『塔の中の少女』(*Stúlkan í turninum*) は、魔力を持つフクロウによって塔に幽閉された少女が、コウモリの姿に変えられた人間の男性の力を借りてフクロウを退治し、塔から逃れて男性と結ばれるという筋である。伝承童話によく見られ、当時のヨーロッパで人気の高かった奇怪譚 (hrollvekja) に属する。もうひとつの『タンポポと蜜蜂』(*Fífill og hunangsfluga*) にはアンデルセンの影響が認められる。咲いたばかりで初心なタンポポのもとにやって来た経験豊かな蜜蜂が、楽しい生涯を経験したいというタンポポの願いを聞き入れて蜜を吸い尽くすのをやめるが、タンポポ

は夜の不安を経験するなどして、失意のうちに枯れていくという物語である。

ヨウナスの功績のひとつに、国民主義を標榜したロマン派詩人の多くとは異なり、ヨーロッパ文学の韻律も積極的に取り入れた点がある。初めてイタリアのソネット形式（14行詩，1行11音節）で恋愛詩『伝えておくれ』（*Ég bið að heilsa*）を書いたのは、その好例である。古語の韻律も活用したが、後述するリームル詩人シーグルズル・ブレイズフィエルズの作品を厳しく批判し、意外にも中世以来のリームルを芸術性に乏しい停滞したジャンルと評したこともある。

上述の『アイスランド』を例に具体的に解説してみよう。この詩はエーレンスレーヤの『アイスランド^{いにしえ}、古の島よ』（*De Island! Oldtidens Øe!* 1823）に啓発されて書かれた。同詩はアイスランド人を父親に持つデンマークの彫刻家トーヴァルセン（Bertel Thorvaldsen 1770～1844）の業績に言及している。墓碑銘に多用される古典ギリシャのエレジーの形式を取り、奇数行6歩格（英 hexameter）と偶数行5歩格（英 pentameter）の2行連句が14回繰り返され、荘重なリズムを湛えている（Xは強音部，xは弱音部）。

Xx(x) Xx(x) Xx(x) (|) Xx(x) (|) Xxx Xx
 Xxx Xxx X | Xxx Xxx X

この2行連句は、1行目の6歩格で高まり、2行目の5歩格で下降して安定を保つというドイツの詩人シラーの見解を踏襲している。すなわち、各行は2つの短詩行を合わせた長詩行からなり、行中休止（|）は奇数行では第3または第4詩脚にあって一定しないが、偶数行では規則的に中央にある。また、弱音部の数は奇数行では異同があるが、偶数行では一定している。さらに、古ゲルマン語詩の伝統に従って脚韻を踏まず、頭韻（同一語頭子音もしくは任意の語頭母音の反復）で貫かれているが、奇数行ではAA | AとAA | BBにほぼ半数ずつ2分されるのにたいして、偶数行ではAA | Aに統一されている（17行目のみ例外的にA | ABB（standa | stað...mönnunum munar））。例として、3～4行目（hh | ff, ll | l）と5～6行目（ff | f, hh

| h) の連句で例示してみよう。

Allt er í heiminum hverfult, og stund þíns fegursta frama
 Xxx Xxx Xxx | Xx Xxx Xx
 lýsir sem leiftur um nótt langt fram á horfinni öld.
 Xxx Xxx X | Xxx Xxx X

Landið var fagurt og frítt og fannhvítir jöklanna tindar,
 Xxx Xxx Xx | Xxx Xxx Xx
 himinninn heiður og blár, hafið var skínandi bjart.
 Xxx Xxx X | Xxx Xxx X

アイスランド ヨウナス・ハトルグリムソン
 (Ísland Jónas Hallgrímsson)

アイスランド 幸せの国 豊かさに満ちた樹氷色の髪いにしえの母
 その古の栄誉 自由 勇猛な偉業はどこへ消えたか
 すべてこの世はとどまるものなく その名声の高みの時は
 遙かに過ぎ去った時代から 真夜中の稲妻に似た光彩を残すのみ
 この国は愛らしく麗しく 氷河の頂は吹き寄せる雪を纏まとって白く
 空は青々として澄み渡り 海は輝くばかりに燦きらめき
 そのとき 誉れ高い祖先 自由の良き勇者らが
 東方より大海の深淵を越えて この至福の地に至り
 花咲く谷間ふところ すみかの懷に住処を見つけて 居を構え
 生業なりわいに励んで秀で 満ち足りた生計を紡ぎ
 エヘサルアウ¹の流れがアルマンナギャウ² になお注ぎ込む
 溶岩の地の高みで 祖先たちのアルシンギ³が開かれ
 キリストの教を奉じると そこにはソルギェイルが立ち
 ギッスルとギェイル グンナル ヒエージン それにニャウトルが集い⁴

勇者らは国中を巡り 港に溢れるきらびやかな船は
栄えある船員を乗せて出航し 数々の品を持ち帰った
同じ地にあつて 徒に足踏みが続けるのは辛い 人々はただ
前来た道を後戻りし わずかに歩みを踏み出すのみ
我ら六百年の営みはどうなったのか
繁栄への道を進んで来たというのか
この国は愛らしく麗しく 氷河の頂は吹き寄せる雪を纏^{まと}って白く
空は青々として澄み渡り 海は輝くばかりに燦^{きらめ}く
だがしかし エヘサルアウの流れがアルマンナギャウになお注ぎ込む
溶岩の地の高みでは アルシングは遠く途絶え
今やスノッリの館⁵は羊小屋と化し 聖なるレグベルグの丘⁶は
年毎^{ごと} ベリーの茂るヒースとなつて 子供らと鴉^{からす}が戯れる
ああ おまえたち 若き者よ 生い育ったアイスランドの息子たちよ
こうして祖先の名誉は 忘却と有閑へと押しやられたのだ！

注1：Öxará, シングヴェトリル (Þingvellir) の平原を流れる大河の名前

注2：Almannagjá, 2 大大陸プレートが衝突してできた峡谷で、シングヴェトリルの入り口。人の声が反響して良く伝わり、集会に適する

注3：Alþingi, シングヴェトリルで開かれた全島集会で、アイスランド人の自由と独立の象徴。第1章参照

注4：ソルギェイル ([ソルゲイル], Þorgeir) はキリスト教改宗を宣言したアルシングの議長 (lögsgumaður)。ギッスル (Gissur), ギェイル ([ゲイル], Geir), グンナル (Gunnar), ヒェージン ([ヘージン], Héðinn), ニャウトル ([ニャール], Njáll) はサガ文学の最高傑作とされる『ニャールのサガ』((Brennu-)Njáls saga) の主要人物 (カッコ内は古語の発音)

注5：Snorrabúð, キリスト教改宗にあたって名言を残したことで知られる首長スノッリ・ソルグリムソン (Snorri goði Þorgrímsson ?～1031)。詩人・政治家のスノッリ・ストゥルトルソン (Snorri Sturluson) とは別人

注6：Lögberg, 「法律の丘」の意味でアルシングの中心。シングヴェトリルの立法はここから宣言された

Ísland, farsældafrón og hagsælda, hrímhvíta móðir!
Hvar er þín fornaldarfrægð, frelsið og manndáðin best?
Allt er í heiminum hverfult, og stund þíns fegursta frama
lýsir sem leiftur um nótt langt fram á horfinni öld.
Landið var fagurt og frítt og fannhvítir jöklanna tindar,
himinninn heiður og blár, hafið var skínandi hjart.
Þá komu feðurnir frægu og frjálsræðishetjurnar góðu
austan um hyldýpishaf, hingað í sælunnar reit.
Reistu sér byggðir og bú í blómguðu dalanna skauti,
ukust að íþrótt og frægð, undu svo glaðir við sitt.
Hátt á eldhrauni upp, þar sem ennþá Öxará rennur
ofan í Almannagjá, alþingið feðranna stóð.
Þar stóð hann Þorgeir á þingi, er við trúnni var tekið af lýði.
Þar komu Gissur og Geir, Gunnar og Héðinn og Njáll.
Þá riðu hetjur um héruð, og skrautbúin skip fyrir landi
flutu með fríðasta lið, færandi varninginn heim.
Það er svo bágð að standa í stað, og mönnunum munar
annaðhvort aftur á bak ellegar nokkuð á leið.
Hvað er þá orðið okkart starf í sex hundruð sumur?
Höfum við gengið til góðs götuna fram eftir veg?
Landið er fagurt og frítt og fannhvítir jöklanna tindar,
himinninn heiður og blár, hafið er skínandi hjart.
En á eldhrauni upp, þar sem ennþá Öxará rennur
ofan í Almannagjá, alþing er horfið á braut.
Nú er hún Snorrabúð stekkur, og lyngið á Lögbergi helga
blánar af berjum hvert ár, börnum og hröfnum að leik.
Ó, þér unglinga fjöld og Íslands fullorönu synir!
Svona er feðranna frægð fallin í gleysku og dál!

4. ロマン派文学の展開 ― 最初の黄金時代 ―

4.1. ロマン派文学の系譜

1830年代に勃興し、19世紀後半に興隆期を迎えたロマン派文学は、近代アイスランド文学の最初の黄金時代であり、叙情詩を中心に展開した。ロマン派文学は自然主義の時代をはさんで新ロマン派に継承され、1930年頃まで持続した主要潮流である。ここではその前半の系譜を紹介しよう。

4.2. ビャルトニ・トウラレンセン ― ロマン派叙情詩の創始者

ヨウナス・ハトルグリムソン以前に活躍したロマン派文学の先駆けがビャルトニ・トウラレンセン(Bjarni Thorarensen 1786～1841)である。レイキャヴィーク近郊の恵まれた家庭に生まれ、南部のラウングウルヴァトラシスラ(Rangárvallasýsla)、フリョウツフリズ(Fljótshlíð)のフリーザルエンディ(Hlíðarendi)で育った。コペンハーゲン大学で法律学を学んでいたとき、ステフェンス(Henrik Steffens 1773～1845)のロマン派自然哲学の講義に魅了され、詩作を開始した。1811年にレイキャヴィークに戻ると、伯父にあたる前述の啓蒙主義者マグヌス・ステッフェンセンのもとで高等裁判所の裁判官を務めた。高い地位に就いたが、ヨーロッパ大陸文化を模範とするマグヌスと激しく反目した。1833年以降は北部のメズルヴェトリル(Möðruvellir)で北部と東部の行政を管轄する要職に就き、同地で没した。

作品は1820年頃から新聞・雑誌に発表され、ハトルグリムル・ピェートゥルソンの『受難詩篇』以来、約150年ぶりの本格的な文学作品となった。作品数が多くなく、没後に『詩集』(*Kvæði* 1847)としてまとめられた点はヨウナスと共通である。しかし、生い立ちにもまして、作風の上で両者は大きく異なっていた。ビャルトニは何よりも中世アイスランド文学の伝統を奉じ、『エッダ』の詩形を思わせる古風で力強い荘重な文体を好んだ。自然な話し言葉の晴朗さにあふれ、外国文学の詩形を取り入れたヨウナスとは対照的である。

ビャルトニは「汝、名高き国よ」(„Þú nafnkunna landið“) で始まる処女作『アイスランド』(Ísland 1818) などの愛国詩や『冬』(Veturinn) のような峻厳な自然描写の傑作を残した。山海の恵みを称え、その脅威を恐れる従来の自然詩にたいして(後述するラウトラ・ビェルグの作品参照)、人間を寄せつけない厳しい自然を賛美し、そこに心身の鍛錬と崇高な精神を求めた。これには、ドイツのヘルダー(Johann Gottfried von Herder 1744~1803) などの自然と精神を関連づける民族思想の影響が認められる。次に紹介する『アイスランドの思い出』もその一例であり、温暖肥沃で平坦なデンマークを退屈で無表情の国として揶揄し、アイスランド人の誇りを鼓舞している。同詩は独立運動下の19世紀末まで『^{いにしえ}古の氷河の国』(Eldgamlá Ísafold) の題名で非公式の国歌となり、イギリス国歌『女王陛下万歳』(God save the Queen) のメロディーに乗せて歌われた。「山の淑女」(Fjallkonan) というアレゴリーは前述のエグギェルト・オウラフソンの詩『錯覚』(Ofsjónir 1752) に由来し、ヒヤウルマル・ヨウンソン(Hjálmar Jónsson) やユーリアナ・ヨウンストウフティル(Júlíana Jónsdóttir) など、後の詩人たちにさまざまな意図で援用された。

アイスランドの思い出 ビャルトニ・トウラセンセン
(Íslands minni Bjarni Thorarensen)

^{いにしえ}古の氷河の国
生い育った愛し^{いと}の故郷
麗しい山の淑女！
^{おのこ}男が乙女を慕うように
海原が陸地を抱き寄せ
日の光が山肌を照らす時
息子らはあなたに思いを馳せる

Eldgamlá Ísafold,
ástkæra fósturmold,
Fjallkonan fríð!
mögum þín muntu kær,
meðan lönd gyrðir sær
og gumar girnast mær,
gljár sól á hlíð.

コペンハーゲンの^{じんあい}塵埃^{さなか}の最中

Hafnar úr gufu hér

ここではだれしも懐かしの
あなたの姿を仰ぎ求める
都会の雑踏は我らを惑わし
不逞^{ふてい}の輩^{やから}は我らを誑^{たぶら}かし
街角の至るところで
愚者どもが我らを嘲^{あざけ}り笑う

heim allir girnumst vér
þig þekka að sjá,
glepur oss glaumurinn,
ginnir oss sollurinn,
hlær að oss heimskinginn
Hafnarslóð á.

山々を知らぬこの国の退屈さよ
霧があたりを覆う日には
士気は衰え 気分は塞ぐ
この国の表情を喩えれば
つくづく鼻を欠いた顔
それに両目すらない
のっぺらぼうの面構え^{つら}

Leiðist oss fjalllaust frón,
fær oss oft heilsutjón
þokuloft léð,
svipljótt land sýnist mér
sífelld að vera hér,
sem neflaus ásýnd er
augnalaus með.

青く澄んだ空の高みに
真白の山裾を頂く
あなたの雄姿はまさに対極
煌^{きらめ}く陽光が照り映える
水晶の如く澄み切った川
空の青さを纏^{まと}った高地
聳^{そび}え立つ溶岩の連なり

Öðruvís er að sjá
á þér hvítfaldinn há
heiðhimin við,
eða þær kristalls ár,
á hvörjar sólin gljár,
og heiðar himinblár,
hájökla rið.

古の氷河の国
生い育った愛しの故郷
麗しい山の淑女！
この世のすべての栄光が
萎^なえることのない間
あなたに至福が訪れるのを

Eldgamlá Ísafold,
ástkæra fósturmold,
Fjallkonan fríð!
ágætust auðnan þér
upplyfti biðjum vér,
meðan að uppi er

我らはひたすらに祈る

öll heimsins tíð!

ビャルトニは精神的な恋愛詩の傑作も残した。官能性を排して暗く深い感情移入を交え、死と連関させて深遠な愛をうたった作品は印象的である。『エッダ』の『フンディング殺しのヘルギの歌Ⅱ』(*Helgakviða Hundingsbana önnur*)に題材を取り、戦死した夫ヘルギの墓中に寝床をしつらえ、夫の霊と一夜を過ごすシグルン(Sigrún)との対話を描いた『シグルンの詩』(*Sigrúnarljóð*)が有名である。『口づけ』(*Kossar*)、『もう一度、口づけしてくれ』(*Kysstu mig aftur*)なども秀作である。次の小品からもその片鱗はうかがえよう。

口づけしてくれ か弱い乙女よ ビャルトニ・トウラレンセン
(*Kysstu mig hin mjúka mæð* Bjarni Thorarensen)

口づけしてくれ か弱い乙女よ	Kysstu mig, hin mjúka mæð!
おまえは病んでいる	því þú ert sjúk.
口づけしてくれ か弱い乙女よ	Kysstu mig, hin mjúka mæð!
おまえは逝くのだから	því þú deyr.
喜んで死を飲み干そう	Glaður drekk ég dauða
おまえの唇が湛える	∴ úr rós ∴
薔薇の花から	á vörum þín,
いとも清らかなその杯よ	því skálin er svo skær.

4.3. グリームル・トムセン — 歴史的題材を取り入れて詩作した教養人

ビャルトニ・トウラレンセンをデンマークに紹介し、その精神の継承者とみなされ、後年、高い評価を得たのがグリームル・トムセン(Grímur Thomsen 1820～96)である。宝石商でベッサスタージル(Bessastaðir)のラテン語学校の理事長を務めた父親の息子に生まれ、コペンハーゲン大学に学んでフランス詩の研究をまとめ、イギリスのロマン派詩人バイロン(George Gordon

Byron 1788～1824) の研究で 1845 年にアイスランド人として初めて美学・近代文学の博士号を得た。2 年間のヨーロッパ遊学の奨学金を獲得し、エーレンスレーヤ、アンデルセン、『フィエルニル』の同人たちと交わり、その後は外交官として活躍したコスモポリタンでもあった。しかし、上層社会での社交生活と外交官としての前途に望みを失い、46 歳で職を辞して、30 年の外国生活に見切りをつけた。その後は故郷のベッサスタージルに引きこもり、公職に就いた。そして、祖国の文学的伝統を敬愛し、『エッダ』、サガ、リームルなどから題材を取って叙事詩、バラード、叙情詩を書き、古典ギリシャ文学を含むヨーロッパ文学の翻訳を手がけて、残りの 30 年を送った。

初の作品集である『詩集』(*Ljóðmæli* 1880) を出版したのが 60 歳と遅く、韻律の問題からも当時は評価が分かれた。しかし、詩的創造性と論理的思考、アイスランド的要素とヨーロッパ的教養を融合させ、人々に知的感化を与えたとして評価が高まっていった。『祖国の歌』(*Landslag*) などの自然をうたった愛国詩も名高い。

グリームルはとくに民間伝承に深い関心を寄せ、幽霊や無法者たちを主題とした民話をもとにすぐれた詩作品を残した。夕暮れ時に無人の荒野を不安のうちに進む旅人を描いた次の『スプレインギサンドゥルにて』は、作曲家シグヴァルディ S. カルダロونس (Sigvaldi S. Kaldalóns 1881～1946) がメロディーをつけ、アイスランド人ならだれでも知っている。スプレインギサンドゥル (Sprengisandur) は中央部に広がる無人の砂礫^{されき}地帯で、「破碎^{はさい}の砂地」の意味である。その北側に広がるオウダウザフレイン (Ódádahraun) は 3,000 平方キロの世界最大の溶岩地帯で、「無法者の溶岩地」を意味する。不毛な土地で居住に適さず、古くは追放された罪人が避難生活を送る場所として知られていた。

スプレインギサンドゥルにて グリームル・トムセン
(*Á Sprengisandi* Grímur Thomsen)

走れ 走れ 砂礫を越えて進め Ríðum, ríðum og rekum yfir sandinn,

アルトナルフェトル ¹ に日が沈む	rennur sól á bak við Arnarfell,
ここは邪悪な霊がたむろする場所	hér á reiki er margur óhreinn andinn,
氷河 ^{おもて} の面に影が落ちるぞ	úr því fer að skyggja á jökulsvell.
神よ 愛馬を導き給え	Drottinn leiði drösulinn minn,
残りの道が遠のくようだ	drjúgur verður síðasti áfanginn.

丘 ^ほ の麓で狐が吼えた	Þey þey! þey þey! þaut í holti tóa,
乾いた口を血で浸したがっているぞ	þurran vill hún blóði væta góm,
だれかが恐ろしく低い男の声で	eða líka einhver var að hóa
羊を呼び寄せようとしていたのか	undarlega digrum karlaróm.
オウダウザフレインの無法者たちが	Útilegumenn í Ódádahraun
密 ^{ひそ} かに家畜を手繰り寄せているのか	eru kannske að smala fé á laun.

走れ 走れ 砂礫を越えて進め	Ríðum, ríðum, rekum yfir sandinn,
ヘルズブレイズ ² に闇が迫る	rökkrið er að síga á Herðubreið,
妖精の女王が馬を駆り立てるぞ	álfadrottning er að beisla gandinn,
その道に迷い込んだら最後だ	ekki er gott að verða á hennar leið.
とっておきの名馬を捧げよう	Vænsta klárinn vildi eg gefa til
キーザギール ³ に着くためならば	að vera kominn ofan í Kiðagil.

注 1 : Arnarhfell, 山の名前で「鷲の山」の意味

注 2 : Herðubreið, オウダウザフレインの東にそびえる台形の山で、「山の女王」と呼ばれる。氷河を突き破って誕生した険しい絶壁で知られ、初登頂は 1908 年

注 3 : Kiðagil, 「ヤギの谷間」の意味の地名

4.4. 口承文芸採集とリームルの継承 — ヨウン・アウルトナソンとシーグルズル・ブレイズフィエルズ

大陸ヨーロッパ諸国では、ロマン主義の時代に口承文芸の採集が盛んに行われた。中世末期以来、アイスランドには「メルヒエンのサガ」(lygisögur,

歴史性を欠くことから「嘘 (lygi) のサガ」の意味」というジャンルがあったが、他の民話も口頭で伝えられていた。前述のアウルトニ・マグヌソンはすでに 17 世紀に民話採取を行っている。1800 年頃には、エイリクル・ラハスダル (Eiríkur Laxdal 1743 頃～1816) が民話を題材とした『オウラヴル・ソウルハトラソンの物語』(*Ólafssaga Þórhallasonar*) および『千夜一夜物語』の枠物語の手法にならった教訓的な『ユートピアの物語』(*Ólandssaga*) を残した。これは初めての近代小説の試みだが、未刊行に終わり、後世にほとんど影響を与えなかった。

本格的な試みは、ドイツのグリム童話とデンマークのティーレ (Just Mathias Thiele 1795～1874) による『デンマークの民間伝説』(*Danske Folkesagn I-IV* 1818～23, 拡大版 1843) に刺激されて始まった。ヨウン・アウルトナソン (Jón Árnason 1819～88) とマグヌス・グリムソン (Magnús Grímsson 1825～60) による 1852 年刊行の『アイスランドの民話』(*Íslenzk ævintýri*) がそれである。規模は小さかったが、アイスランドを訪れたドイツ人のコンラート・マウラー (Konrad Maurer 1823～1902) が 1860 年に類書を発表し、ドイツで反響を呼んだこともあって、1862/64 年にライプツィヒで 2 巻本に拡大され、ヨウン・アウルトナソン編『アイスランドの伝説と民話 I-II』(*Íslenskar þjóðsögur og æfintýri I-II*) として世に出た。残りの資料を収録した完全版『アイスランドの伝説と民話 I-VI』(*Íslenskar þjóðsögur og ævintýri I-VI*) は、1954～61 年にレイキャヴィークで 6 巻本として出版された。日本でも 62 話の抄訳『アイスランドの昔話』(菅原邦城訳) やドイツ語からの『世界の民話 アイスランド』(谷口幸男訳) がある。語り部の言葉を忠実に再現したことで知られ、妖怪、魔術師、追放者の話を中心に多彩な内容で、他のジャンルにも影響を与えた。ヨウンは 1881 年にアイスランド国立図書館 (Landsbókasafn Íslands) の初代館長に就任し、民俗学者オウラヴル・ダーヴィズソン (Ólafur Daviðsson 1862～1903) とともに『アイスランドのなぞなぞ、笑い話、ヴィーキヴァーキ、シュールル I-IV』(*Íslenskar gátur, skemmtanir, vikivakar og þulur I-IV* 1887～1903) の編集も手がけた。同書は新ロマン派の女性詩人フルダなどに影響を与えた。

約 500 年に及んだリームルは、この時代に最後の継承者を見た。後述するヒャウルマル・ヨウンソンと並んで重要なのは、シーグルズル・ブレイズフィエルズ (Sigurður Breiðfjörð 1798～1846) である。西部のブレイジフィエルズル (Breiðfjörður) で貧しい家に生まれ、十分な教育を受けられず、樽職人の修行を積んだコペンハーゲンで文学の息吹に触れて、リームルを作り始めた。グリーンランドに派遣された 1831～34 年の間に孤独の中で書いた『ヌマのリームル』(*Númarímur* 1835) は、古代ローマの王ヌマ・ポンピリウス (Numa Pompilius 紀元前 753～673) を扱ったフランスの小説に題材を得ている。もうひとつの代表作『トリスタンとインディアナのリームル』(*Rímur af Tristrani og Indíönu* 1831) は前述のヨウナス・ハトルグリムソンの批判を被った。それでも、当時は人気が高く、前述のマグヌス・ステッフェンセンと並んで最も多く書物を刊行した。

4.5. ヨウン・トウロドセン — 近代長編小説の開拓者

近代の散文文学は、サガの根強い伝統の影に隠れて看過される時代が長く続き、詩作品よりも発達が遅れた。近代長編小説の開拓者は北西部出身のヨウン・トウロドセン (Jón Thoroddsen 1818～68) である。ヨウンは前述のエイリクル・ラハスダルの草稿を知る由もなく、自国の模範をまったく欠く状態から出発した。ベッサスタージル・ラテン語学校を卒業後、1841～50 年にはコペンハーゲン大学で法律を学んだが、作家ギスリ・ブリニルフソン (Gísli Brynjúlfsson 1827～88) と文芸誌を発行するなどした。代表作のひとつは、ギスリの勧めで親しんだイギリスのスコットとディケンズの影響を受けて、留学の最後の年に発表した『青年と娘』(*Piltur og stúlka* 1850) である。同年、祖国に戻って故郷の北西部で行政職に就いたが、もうひとつの代表作は、コペンハーゲン大学で学位を取得するべく再度の留学を果たした 1853～54 年に取り組み始めた『男と女』(*Maður og kona*) である。未完に終わったが、死後の 1876 年に刊行された。前者は伝統的な農民社会とレイキャヴィークを舞台に、写実的な自然描写と多様な人物描写を交え、男女が紆余曲折を経て結ばれる過程を描いたユーモアに富む愛の田園物語である。

後者も同様のテーマを扱っているが、民間伝承とサガやリームルの要素を多く取り入れている。2作ともロマン派の小説らしく、ゆるやかな構成を取り、脇役の様々な登場人物のエピソードを織り込んだ万華鏡のような趣がある。ヨウンの詩のいくつかは今日でもよく知られ、この2作にも取り入れられている。

4.6. ロマン派3大詩人

19世紀後半には、ロマン派3大詩人と称えられた人物が輩出した。いずれも学識豊かな教養人で、西洋古典や北欧文学の翻訳を行い、精神主義を重んじた。

まず、バーネディフト・グレンダル(Benedikt Gröndal 1826～1907)はベッサスタージルとレイキャヴィークの両ラテン語学校の古典語教師で、翻訳者および辞書編集者としても名高いスヴェインビェルトン・エイイルソンの息子である。コペンハーゲン大学でアイスランド人として初めて北欧語文献学で修士号を取得し、画家、書家、歴史家、哲学者、自然科学者という多方面の才能と学識を備え、レイキャヴィーク・ラテン語学校で10年間、自然科学を講じた。父親が残したホメロスの翻訳やアイスランド語の辞書編集の仕事を補う業績も残している。バーネディフトはロマン派の理論的擁護者として、後述する自然主義作家たちを痛烈に批判した。たび重なる当時の北米移住の波にたいしても、軽薄な行為として非難の言葉を浴びせている。しかし、その詩はあまりに観念的で、今日では読まれることは少ない。むしろ「騎士のサガ」(riddarasögur)の手法でイタリアのソルフェリーノ(Solferino)の戦いを描いた『死者の国の戦いの物語』(*Sagan af Heljarslóðarorrustu* 1861)、没後の1923年に出版された自伝『徒然の日々』(*Dægradvöl*)によって知られている。

次に、ステイングリムル・トルステインソン(Steingrímur Thorsteinsson 1831～1913)は西部の半島スナイフェルスネース(Snæfellsnes)の先端に近いアルトナルスターピ(Arnarstapi)に生まれた。コペンハーゲン大学で西洋古典学の修士号を取得して同地で教職に就き、北欧諸国と英独仏の言語を

習得して近代ヨーロッパ文学を渉猟し、ヨウン・シーグルソンの『新社会誌』の主要執筆者として活躍した。20 年余り後に祖国に戻ると、1872 年からレイキャヴィーク・ラテン語学校で 41 年間、教壇に立ち、没年までの 10 年間、校長も務めた。

ステイングリムルは初のシェークスピアのアイスランド語訳となった『リア王』、『ロビンソン・クルーソー』、『千夜一夜物語』、イソップ童話、アンデルセン童話、プラトンの『クリトン』、『ソクラテスの弁明』、バイロンやゲーテの詩など、数々の世界文学の名作を翻訳した。前述のヨウン・ソルラウクソンとスヴェインビェルトン・エイイルソンに続くヨーロッパ文学の伝道者の名にふさわしい。明朗な作風の自然詩などで当時は巨匠として崇拜されたが、その後、詩人としての名声はやや薄れていった。ここではシグヴァルディ S. カルダロウンスの作曲で、むしろ歌曲として有名な次のいかにも平明な詩を紹介しよう。

荒野の白鳥の歌 ステイングリムル・トルステインソン
(*Svanasöngur á heiði* Steingrímur Thorsteinsson)

私は夏の夜に馬を走らせていた	Ég reið um sumaraftan einn
荒涼とした広野を ^{ひと} 独り	á eyðilegri heiði.
すると 長旅の辛さがふと消えた	Þá styttist leiðin löng og ströng,
甘美な白鳥の歌を聞いたからだ	því ljúfan heyrði' eg svanasöng,
そう 荒野の白鳥の歌を	já, svanasöng á heiði.

山々には美しい夕焼けが輝いていた	Á fjöllum roði fagur skein,
そして ^{あた} 辺りの至るところから	og fjær og nær úr geimi
耳元に天使のような調べがこだました	að eyrum bar sem englahljóm
孤独な崇高さの中で	í einverunnar helgidóm
あの荒野の白鳥の歌が	þann svanasöng á heiði.

こんなにも心地良く 遠くからの	Svo undurlítt ég aldrei hef
音色に酔い痴 ^し れたことはなかった	af ómi töfrast neinum.
夢見心地のまま 私は道を進み	Í vökudraum ég veg minn reið
時の経つのを忘れた	og vissi' ei hvernig tíminn leið
荒野の白鳥の歌を聞きながら	við svanasöng á heiði.

4.7. マハティアス・ヨホクムソン — 国民詩人に叙せられた精力的な牧師

ロマン派3大詩人の最後に紹介するのは、マハティアス・ヨホクムソン (Matthías Jochumsson 1835～1920) である。北西部に位置する(東)バルザストランドルシスラ ((Austur-)Barðastrandarsýsla), ソルスカフィエルズル (Þorskafjörður) のスコウガル (Skógar) で14人の子持ちの貧しい農家に生まれ、高等教育を受けられず、商業や漁業に従事した。22歳で商人として修行を積むべくコペンハーゲンに渡ったが、言語と文学の勉強に没頭し、前述のステイングリムル・トルステインソンの知遇を得た。天分を見込まれ、友人たちの援助で1865年に神学校を卒業し、各地の牧師を歴任した。後年、国民詩人 (þjóðskáld) に叙せられ、1900年以降はアルシングから終身年金を受けたが、大家族を養って清貧の生活を送り続けた。晩年の33年間は、北部のアークルエイリ (Akureyri) で過ごした。

マハティアスは多方面のジャンルで作品を残した精力的な作家である。生涯、活力にあふれ、硬直した教会の教条主義に反駁し、海外に出かけて北欧諸国の文学者と幅広く交わった。若い冒険家と田舎の少女の恋愛を描いた学生時代の出世作『追われた者たち』 (Útilegumennirnir 1864) は、最初のロマン派戯曲として今日でも上演される。中世の『グレットシルのサガ』 (Grettis saga Ásmundarsonar) に題材を取った連詩『グレヘティルの詩^{うた}』 (Grettisljóð 1897) や世俗的な叙情詩のほかに、スノッリ・ストゥルトルソン、ハトルグリムル・ピュートゥルソン、エッギェルト・オウラフソンなど、古今の著名人の偉業を劇的に描いた追悼詩が有名である。シェイクスピア、バイロン、ノルウェーの劇作家イブセン (Henrik Ibsen 1828～1906)、スウェーデンの詩人テングネール (Esaias Tegnér 1782～1846) などの翻訳も広く手がけた。

自伝や多数の論文、エッセイも執筆し、編集業務にも携わっている。

マハティアスの作品を貫く精神は、信仰と楽観主義と人間愛にある。深い情感に満ちた賛美歌などの宗教詩は、17世紀のハトルグリムル・ピェートゥルソン以来の名作と称えられ、今日でも人々の敬愛を集めている。以下に紹介する『頌歌』は旧約聖書の詩篇第90章に基づくもので、1874年の建国千年祭の折に献呈された。スヴェインビェルトン・スヴェインビェルトンソン (Sveinbjörn Sveinbjörnsson 1847～1927) の作曲で現在のアイスランドの国歌になっており、ふつう第1節だけが歌われる。

頌 歌 マハティアス・ヨホクムソン
(*Lofsöngur* Matthías Jochumsson)

ああ 我らが国の神よ！ ああ 神よ我らが国の
我らは聖なる 聖なる御名をひたすらに称える
天球の星々よりあなたの頭^{こゝべ}に王冠を
あなたの軍勢^{えいごう} 永劫の集団が授ける
あなたにとって一日の経過は千年にも達し
千年の区切りは一日にも満たない
我らはただ神に祈りを捧げ 果て行く
涙に震える一輪の永久^{とわ}の小花
 アイスランド その千年の歴史
我らはただ神に祈りを捧げ 果て行く
涙に震える一輪の永久の小花

Ó, guð vors lands! Ó, lands vors guð,
vér lofum þitt heilaga, heilaga nafn.
Úr sólkerfum himnanna hnýta þér krans
þínir herskarar, tímanna safn.
Fyrir þér er einn dagur sem þúsund ár

og þúsund ár dagur, ei meir:
eitt eilífðar smáblóm með titrandi tár,
sem tilbiður guð sinn og deyr.

Íslands þúsund ár, —
eitt eilífðar smáblóm með titrandi tár,
sem tilbiður guð sinn og deyr.

ああ 神よ！ ああ 神よ 我らは御前に^{ひざまず}跪き
熱く 熱く燃える魂を捧げる
父なる神よ ^{あまた}数多の祖先の主よ
我らは最も聖なる祈りを唱える
唱え そして千年の間 感謝を捧げる
あなたこそ我らが唯一の庇護者ゆえに
我らは唱え そして震える涙を湛えて感謝する
あなたこそ我らの運命の車輪を司った御方ゆえに
アイスランド その千年の歴史
暁に凍てついた我らのこぼれ落ちる^{ぬる}涙が
輝く日の光を浴びて温まんことを

Ó, guð! Ó, guð, vér föllum fram
og fórnum þér brennandi, brennandi sál,
guð faðir, vor drottinn frá kyni til kyns,
og vér kvökum vort helgasta mál.
Vér kvökum og þökkum í þúsund ár,
því þú ert vort einasta skjól.
Vér kvökum og þökkum með titrandi tár,
því þú tilbjóst vort forlagahjól.
Íslands þúsund ár
voru morgunsins húmköldu, hrynjandi tár,

sem hitna við skínandi sól.

ああ 我らが国の神よ！ ああ 神よ我らが国の
我らはただ風にたなびく藁にも似た生き物
あなたが我らから苦難の塵を解き払う
光でなく 命でなければ ただ絶え逝く定め
ああ 朝の訪れとともに我らの最愛の命となり
日々の難儀にあっては我らの手を導き
夜半には天から我らの憩いと宿りとなって
この国の人々の進む道を示し給え

アイスランド その千年の歴史

この国の人々の命が栄え 涙に暮れることなく
神の国への道程が豊かな実りを結ばんことを

Ó, guð vors lands! Ó, lands vors guð!
vér lifum sem blaktandi, blaktandi strá.
Vér deyjum, ef þú ert ei ljós það og líf,
sem að lyftir oss duftinu frá.
Ó, vert þú hvern morgun vort ljúfasta líf,
vor leiðtogi í daganna þraut,
og á kvöldin vor himneska hvíld og vor hlíf
og vor hertogi á þjóðlífsins braut.

Íslands þúsund ár
verði gróandi þjóðlíf með þverrandi tár,
sem þroskast á guðsríkis braut.

出典

- ハトルグリムル・ピエトゥルソン『野に咲く花の枯れるがごとく』（抄）（Hallgrímur Pétursson: *Allt eins og blómstrið eina*）（Guðmundur Andri Thorsson（útg.）. 1992: 47）
- ヨウナス・ハトルグリムソン『アウスター愛する母語』（Jónas Hallgrímsson: *Ásta*）（ib. 100-101）, 『アイスランド』（*Ísland*）（ib. 100）
- ビャルトニ・トゥラレンセン『アイスランドの思い出』（Bjarni Thorarensen: *Íslands minni*）（ib. 14）, 『口づけしてくれ、か弱い乙女よ』（*Kysstu mig hin mjúka mæð*）（ib. 24）
- グリーンムル・トムセン『スプレインギサンドゥルにて』（Grímur Thomsen: *Á Sprengisand*）（ib. 398）
- ステイングリムル・トルステインソン『荒野の白鳥の歌』（Steingrímur Thorsteinsson: *Svanasöngur á heiði*）（ib. 498-499）
- マハティアス・ヨホクムソン『頌歌』（Matthías Jochumsson: *Lofsöngur*）（Sigurður Nordal. 1980¹⁰: 164-165）

* 本研究は科研費（21520425）の助成を受けたものである。

参考文献

- Andersen, Erik (udg.). *Islandske Noveller*. København. Norden. 1945.
- Andrés Kristjánsson et al. (útg.) *Íslenzkir pennar. Sýnisbók íslenskra smásagna á tuttugustu öld*. Reykjavík. Setberg S-F. 1956: 111-134.
- Andrésson, Kristinn E./Bruno Kress (Hrsg.). *Isländische Erzähler*. Berlin. Aufbau-Verlag. 1963.
- Árni Sigurjónsson/Peter Hallberg (utg.). *Tanken strövar vida. 25 íslenska smásögur*. Reykjavík. Mál og Menning i samarbete med Bokklubben Norden. 1990.
- Ásgeir Pétursson/Steingrímur J. Þorsteinsson (eds.). *Seven Icelandic Short Stories*. Reykjavík. The Ministry of Education. 1960.
- Bandle, Oskar et al. (eds.). *The Nordic Languages. HSK 22.1/2*. Berlin/New York. de Gruyter. 2002/2005.
- Bartuske, Heinz (übers.). *Moderne Erzähler der Welt: Island*. Tübingen/Basel. Erdmann. 1976.

- Bartuske, Heinz/Ingeborg Drewitz/Sigurdur Magnússon (Hrsg.). *Land aus dem Meer. Zur Kultur Islands und der Færöer Inseln*. Tórshavn. Emil Thomsen. 1980.
- Beck, Richard (ed.). *Icelandic Lyrics. Originals and Translations*. Reykjavík. Þórhallur Bjarnarson. 1930.
- Beck, Richard (ed.). *Icelandic Poems and Short Stories*. Princeton. Princeton University Press for the American-Scandinavian Foundation. 1943. (Repr. Freeport, New York. 1968).
- Bergkvist, Sven O./Heimir Pálsson (övers.). *Berättelser från Island*. Stockholm. Rabén & Sjögren. 1976.
- Bien, Horst (Hrsg.). *Nordeuropäische Literaturen*. Leipzig. VEB Bibliographisches Institut. 1980.
- Birr, Ewald (Hrsg.). *Literatur aus Nordeuropa*. Berlin. Willi-Bredel-Bibliothek, Stadt- und Bezirksbibliothek Rostock. Zentralinstitut für Bibliothekswesen. 1990².
- Bjarni M. Gíslason. *Islands litteratur efter sagatiden. ca. 1400-1948*. København. Aschehoug Dansk Forlag. 1949.
- Björn Þorsteinsson/Bergsteinn Jónsson. *Íslands saga til okkara daga*. Reykjavík. Sögufélag. 1991.
- Boucher, Alan (tr.). *Short Stories of Today by Twelve Modern Icelandic Authors*. Reykjavík. Iceland Review. 1972.
- Brøndsted, Mogens. (Hrsg.). *Nordische Literaturgeschichte 1, 2*. München. Fink. 1984.
- Dóra Hafsteinsdóttir/Sigríður Harðardóttir (ritstj.). *Íslenska alfræðiorðabókin. I-III*. Reykjavík. Örn og Örlygur. 1990.
- Einar Laxness. *Íslandssaga. I-III*. Reykjavík. Vaka-Helgafell. 1998² (1995).
- Erlendur Jónsson. *Íslensk bókmenntasaga 1550-1950*. Reykjavík. Bókagerðin Askur. 1977⁵.
- Eskeland, Ivar (utg.). *Island forteller*. Oslo. Den norske Bokklubben. 1979.
- Firchow, Evelyn Scherabon (ed.). *Icelandic Short Stories*. Boston. Twayne Publishers & The American Scandinavian Foundation. 1974.
- Friese, Wilhelm. *Nordische Literaturen im 20. Jahrhundert*. Stuttgart. Kröner. 1971.
- Glauser, Jürgen (Hrsg.). *Skandinavische Literaturgeschichte*. Stuttgart/Weimar. Metzler. 2006.
- Guðmundur Andri Thorsson (útg.). *Þjóðskáldin. Úrval úr bókmenntum 19. aldar*. Reykjavík. Mál og menning. 1992.
- Guðmundur Hálfðanarson. *Historical Dictionary of Iceland*. Lanham, Maryland et al. The Scarecrow Press. 2008² (1997).
- Gugenberger, Eva/Mechthild Blumberg (Hrsg.). *Vielsprachiges Europa*. Frankfurt a.

- M. et al. Peter Lang. 2003.
- Gunnar Karlsson (tr. Anna Yates). *A Brief History of Iceland*. Reykjavík. Mál og menning. 2000.
- Hannes Pétursson/Helgi Sæmundsson. *Íslenskt skáldatal a-l/m-ö*. Reykjavík. Bókaútgáfa menningarsjóðs og Þjóðsfélagsins. 1973/76.
- Haugen, Einar. *Die skandinavischen Sprachen*. (übers. von Magnús Pétursson). Hamburg. Buske. 1984.
- Heimir Pálsson. *Straumar og stefnur í íslenskum bókmenntum frá 1550*. Reykjavík. Íðunn. 1978.
- Heimir Pálsson. *Frá lærdómsöld til raunsæis. Íslenskar bókmenntir 1550-1900*. Reykjavík. Vaka-Helgafell. 1999.
- Heimir Pálsson. *Sögur, ljóð og líf. Íslenskar bókmenntir á 20. öld*. Reykjavík. Vaka-Helgafell. 1999.
- Helga Kress/Idar Stegane (utg.). *Lystreise og andre islandske noveller*. Oslo. Pax Forlag. 1976.
- Helga Kress (ritsj.). *Draumur um veruleika. Íslenskar sögur um og eftir konur*. Reykjavík. Mál og menning. 1977.
- Henriksen, Carol et al. (eds.). *Studies in the Development of Linguistics in Denmark, Finland, Iceland, Norway and Sweden*. Oslo. Novus Forlag. 1996.
- Hovdhaugen, Even et al. (eds.). *The History of Linguistics in the Nordic Countries*. Jyväskylä. Societas Scientiarum Fennica. 2000.
- Ingi Bogi Bogason et al. (útg.). *Gegnum ljóðmúrinn. Safn íslenskra ljóða á 20. öld*. Reykjavík. Mál og menning. 1987.
- Íslensk bókmenntasaga. I-II*. (ritstj.), Vésteinn Ólason. *III-V*. (ritstj.) Halldór Guðmundsson. Reykjavík. Mál og menning. 1992-93, 1996-2006.
- Jakobina Johnson (tr.). *Northern Lights. Icelandic Poems*. Reykjavík. Bókaútgáfa Menningarsjóðs. 1959.
- Jóhann Hjálmarsson. *Íslensk nútímaljóðlist*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1971.
- Jóhannes Nordal//Valdemar Kristinsson. *Iceland. The Republic*. Reyjavík. The Central Bank of Iceland. 1996.
- Jón R. Hjálmarsson. *History of Iceland. from the Settlement to the Present Day*. Reykjavík. Iceland Review. 1993.
- Knüppel, Christine (Hrsg.). *Isländische Literatur in deutscher Übersetzung 1860-2000*. Köln. Seltmann & Hein. 2002.
- Kristinn E. Andrésson. *Íslenskar nútímabókmenntir 1918-1948*. Reykjavík. Mál og menning. 1949.

- Kristinn Kristjánsson. *Íslenskar bókmenntir 1550–1900*. Reykjavík. IDNÚ. 1996.
- Kristján Eiríksson/Sigurborg Hilmarsdóttir. *Bókastoð. Ágrip af íslenskri bókmenntasögu*. Reykjavík. IDNÚ. 1999.
- Lindroth, Hjalmar (utg.). *Från Island. Nutidanoveller i översättning. (Skrifter utgivna af Samfundet Sverige-Island 2.)*. Uppsala. Lundequistska Bokhandeln. 1932.
- Lyhne, Otto. (red.). *Lademanns Leksikon. 1–4*. København. Lademann. 2003
- Magnús Pétursson. *Isländisch*. Hamburg. Helmut Buske. 1978.
- Mitchell, P. M./Kenneth Ober (eds.). *Bibliography of Modern Icelandic Literature in Translation. Islandica XL*. Ithaca/London. Cornell University Press. 1975.
- Neijmann, Daisy (ed.). *A History of Icelandic Literature*. Lincoln & London. Nebraska University Press/The American-Scandinavian Foundation. 2006.
- Ober, Kenneth H. (ed.). *Bibliography of Modern Icelandic Literature in Translation, 1971–1980. Islandica XLVII*. Ithaca/London. Cornell University Press. 1990.
- Paul, Fritz (Hrsg.). *Grundzüge der neueren skandinavischen Literaturen*. Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1982. 343–376.
- Poestion, J. C. (Hrsg.). *Isländische Dichter der Neuzeit in Charakteristiken und übersetzten Proben ihrer Dichtung*. 1905². München/Leipzig. Georg Müller. 1897.
- Runnquist, Åke. *Moderna nordiska författare*. Stockholm. Forum. 1966.
- Silja Aðalsteinsdóttir. *Bók af bók. Bókmenntasaga og sýnisbók frá 1550–1918*. Reykjavík. Mál og menning. 1993.
- Stefán Einarsson. *History of Icelandic Prose Writers 1800–1940*. Ithaca, New York. Cornell University Press. 1948.
- Stefán Einarsson. *A History of Icelandic Literature*. Baltimore. The John Hopkins Press/The American-Scandinavian Foundation. 1957.
- Stefán Einarsson. *Íslensk bókmenntasaga 874–1960*. Reykjavík. Snæbjörn Jónsson & Co. H. F. 1961.
- Stevens, Patrick J. (ed.). *Dictionary of Literary Biography: Icelandic Writers, vol. 293*. Farmington Hills MI. Gale. 2004.
- Vigdís Finnbogadóttir (valdi). *Íslensk kvæði*. Reykjavík. Mál og menning. 1989.
- Westergård-Nielsen, Chr (red.). *Ny nordisk Novellekunst*. København. C. A. Reitzels Forlag, Alex Sandal. 1942.
- Zimmermann, Lutz (Hrsg.). *Europäische Anthologie: Neue Literatur aus Litauen, Albanien, Island und Finnland*. Berlin. Literarisches Colloquium. 1988.
- Zuck, Virpi (ed.). *Dictionary of Scandinavian Literature*. New York/Westport, Connecticut/London. Greenwood Press. 1990.
- Örn Sigurðsson (ritstj.). *Kortabók Íslands*. Reykjavík. Mál og menning. 2000.

清水 誠「現代アイスランド文学作品集 (1)～(5)」『ノルデン 28～33 号』1991-96.

清水 誠「アイスランド語」(石井米雄 編『世界のことば・辞書の辞典 ヨーロッパ編』三省堂. 2008 : 360-376.

清水 誠「アイスランド語研究と辞書編集の歴史」『日本アイスランド学会会報第 28 号』2009 : 1-34.

谷口幸男 訳(小澤俊夫 編)『世界の民話 アイスランド』ぎょうせい. 1985.

ヨウン・アウトナソン編(菅原邦城 訳)『アイスランドの民話』三弥生書店. 1979.